

第 10 回高等学校改革プラン推進委員会（第一推進委員会）議事録

1 日時 平成 17 年 10 月 26 日（水）午前 9 時 30 分～午後 0 時 30 分

2 場所 N O S A I 長野会館 6 階 大会議室

3 出席委員

中村 正行委員長	牧 重信委員
森野 貞雄副委員長	若麻績 享則委員
青木 一委員	清水 保委員
中沢 一委員	小山 壽一委員
小山 元彦委員	宮本 精一委員
塚田 芳樹委員	丸山 稔委員

4 開会

（中村委員長）

おはようございます。

1 名の委員さんがまだですが、おそろいになりつつありますので第 10 回の高等学校改革プラン推進委員会を始めさせていただきます。

前回、この 10 回の進め方について後半のところでご議論をいただきまして、具体的なところへ議論を移していきたいということです。総合学科の配置、多部制の配置を考えながら候補案、検討材料として挙がっている教育委員会からの資料に基づいて、具体的に検討していくということで、まず総合学科と職業科の在り方等検討しておく必要があると思います。

それから地域の皆さん、あるいは各団体からたくさんご意見、要望等いただいておりますのでそれをどう反映していくとかいうことで、既にホームページにご案内が載っていますが、推進委員会の中で時間を設けて意見を直接お聞きしようということになりました。

方法等については事務局と私と相談させていただいて、ホームページにアップしたような形になりますが、次回あるいはその次、ご要望をいただきながら進めていこうと考えています。

いただいた要望と、この委員会との意見の擦り合わせというようなこと、あるいはもう少し深く議論をするということを進めながらやっていかないとはいけないんですが、その辺もまたご意見をいただきながらというふうに考えています。

きょうは前回予定していましたが、総合学科、多部制・単位制と絡めて職業科の話を具体的に行いたいと思います。私からの提案ですが、まず第 1 区、2 区を集中的に取り上げて、割合地域がまとまっておりますので議論が進めやすいのかなというふうに思います。

中野市、飯山地区等独自に考える会等立ち上げていただいて議論していただいています。今後直接この委員会へ要望として上げてきていただけるといいうふうにお聞きしています。

きょうも資料がきているのでしょうか。ですので、ここをまず委員会としての議論をしておきたいと思います。きょうも資料を準備していただいていますので、その資料説明と資料に関する質疑、そのあと地域からのご意見、皆さん、委員さん方がお聞きになってい

る意見を聞いて、そのあと協議のほうに移っていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは事務局のほうから、資料の説明をお願いいたします。

5 資料説明

高校教育課三澤教育支援主事から説明 【説明内容省略】

（中村委員長）

ありがとうございました。

それでは資料に関するご質問、要望等ありましたらお願いいたします。資料1は前回事務局のほうにお願いした資料でございます。内容はよろしいでしょうか。

（青木委員）

どなたかの委員さんから、県教委のほうで、各推進委員会のほうでまとまったものを受けて、実施計画を策定をしていくと。その中で節目節目に県議会があるわけですが、その中での議論がどのようなふうになっていくのか、また教育委員会での、委員会の中での決定事項の進んでいくものと、県議会という議会の議決を得なければならないというもの、その説明を求める、どなたから質問があったと。その資料を出してくださいというのが、前回あったと思うんですが、それはどうなんだろうかね。

（中村委員長）

条例の話でしょうか。

（丸山委員）

例えば学校名を変えますよね。そうすると設置条例などの改正になるんですね。条例で決定しないと、学校名がスタートできないんじゃないかなということもあるんです。それからあるいは多部制・単位制の場合ですね。同じ学校名だとして、普通科から変わるわけですね。

そういうのは条例上はどういうふうな関係になっているのか。県会で承認をしていくということが、どこかで一緒だと思うんだけど、このスケジュールの中で、どこでやるのかという問題なんです。

そういうことを質問しました。

それからもうひとつ、募集停止もそうですね。

（中村委員長）

多分資料1に関連してご説明いただけたと思いますが、よろしくお願いいたします。

(吉江高校教育課長)

お尋ねの件の関係でございますが、まず基本的にはかねてよりお話し申し上げておりますが、17年度末に実施計画の策定の段階では、教育委員会におかけしまして、その上で実施計画を策定してまいりたいと当然ながら申し上げてきました。

それと募集定員につきましては、これが従来から教育委員会の決定事項ということでお願いしておりますので、これも教育委員会におかけして決定してまいりたいと思っています。

それとあと、今のお話の条例の関係ですが、こちらのほうに記載してございませんが、実はよその県でいろいろなやり方がございます。形態といたしまして、いわゆる条例の改正も含めてというのは、例えばの話が最終年度に行うとか、いろいろな形態がございますので、そこら辺につきましては今後の状況の中で、検討してまいりたいと思います。

(中村委員長)

青木委員、よろしいですか。

(丸山委員)

様々なケースがあるということで、今後の経緯を見てということなんだけれども、例えば具体的に考えるとこうなりますよね。県の計画どおりだとしたら、来年4月からスタート、3月までに実施計画を立てますね。そうすると統廃合の学校は、教育課程その他検討しながら、校名を検討していくわけですね。

募集のときには、つまり募集を出すときですね。例えば推薦もありますので、推薦入試をやるとしたら、推薦の募集の観点とかいうのも含めて、出すのはかなり早いですね。そのときに校名もなしで募集はできないと思うんです。校名が決まりますね。校名を決めて、それでやっていきますね。

ところが県会では、例えばですよ、来年の2月、3月などに県会でやらないとしたら、その後になりますね、例えばそれがスタートのときの再来年の2月、3月の県議会だとしたら、正直言ってもうスタートして既成事実ができたときに県議会と反対、大混乱ですよ。既成事実をつくっちゃって、県会を通しちゃうというやり方ですか。そういうふうに映るのですが。

それほど県会との関係は非常に重要だというふうに思うんです。その辺は今後の経緯を見てというのは今後検討する具体的な考えはないのかどうか。私は個人的にはそれは、2月、3月のときに出すと。あるいはちゃんと校名が決まって中身ができたところで、県会、決まってからスタートというのが普通ではないのかなというふうに思いますが、違いますか。

(中村委員長)

事務局、お願いします。

(吉江高校教育課長)

先ほども申し上げましたように、よその県の例で申し上げますと、例えばこの図の中の、この四角枠の中。この四角枠の中のいずれかの年度において、条例を改正するような県も事実上ございます。

その上で、ひとつの実施計画というようなもの策定の上で、移行期の、最終年度は21年度に完成形の、言ってしまいますとC校の完成形ができるわけでございますので、その時期を見てというような県もございますし、それ以外の県といたしましても、今お話がございましたように、極めて早い段階から改定をするということは基本的には、あまり見あたらないと思います。

そんなことの中で、全体的なイメージが固まる方向の、いわゆる私どもが実施計画を具体的に策定する段階におきまして、そのスケジュールについても検討してまいりたいと思います。

(青木委員)

中野地区というのは、2つの高校を統合して総合学科を、C校をつくるという案が提示されているわけでありますから、当然今、この後地域での報告の中でも言おうかと思っていたのですが、大変今、いい議論が中野地区では発生しつつあるわけです。

そしてそのいい議論の中には、総合学科高校、これも新たなチャンスとしてとらえようという声も、だいが出始めているわけです。そういった思いが出ていたときに、総合学科高校、確かに高校数を削減するという全体プランの中では、23億円でしたっけ、経費の削減できるシミュレーションの数字が出されておりましたけれども、総合学科高校また多部制・単位制に新たな高校をつくる、その整備の費用のものは、まだ計算しづらいという、わからないのですが、数値は示されていませんよね。

そうなると実施計画の中で、19年度からもう既に総合学科高校としてスタートするといふときに、いわゆる学校の総合学科高校としての学校整備にかかるお金、財政の背景の整備をしていかなければいけませんよね。

当然それは県議会に対して、恐らく提案をしていかなければいけないんじゃないかと思うわけです。ならそれは、どこの議会の時点で提案するのか、もしそれが6月議会であるならば、この推進委員会の結論を持って、教育委員会で実施計画を練り、それで教育委員会で提案していくという形の中で、合わせて予算の部分も数値を積み上げていって、今度議会に提案していかなければいけないと思うんです。

その辺のことの報告というか、スケジュールはひとつも今まで説明がないわけですが、地域にとってその提案を受け入れようとしたときに、そちらの面で根底から崩れてしまったのでは、逆に地域の思いが、せっかく盛り上がったものも水をかけてしまうようなことがありますので、ぜひともその辺の思いが、ひとつの選択肢の思いが実ったときにはきちんと背景が整っているというような、安心担保をいただかないと、地域論でもなかなか進めづらくなっていくということがありますので、その辺の説明をいただきたいと思います。

(中村委員長)

これも、資料など文章のような形のほうがよろしいでしょうか。

(青木委員)

今現在のものを。

(中村委員長)

口頭でよろしいでしょうか。事務局、お願いいたします。

(吉江高校教育課長)

今、こういうような形でそれぞれの推進委員会で議論いただいています。それでその推進委員会のおまとめの方向を、まずは受けまして、私ども先ほど申し上げましたように、基本的には12月末までを目途にいただきました報告を受けまして、3月末までに一つの方向付けをしてまいります。

その方向付けの中で、当然ながら今お話がございましたように、それぞれの地域のほうで具体的に、かなり具体化した方向の議論が進んでいる地域もあるということを聞いておりまして、またそういうようなことの中でお決めいただいた内容ということであれば、当然ながら重く受け止めて、私ども実施計画を策定していかなければいけないと思っておりますので、その段階におきまして、今お話がございましたような、今後の具体的にどうやっていくかということも含めまして、実施計画を策定する段階において、しっかりとした議論をしていくというようなことで、今現在こういう形でやっていますので、よろしくお願いしたいというような話で、なかなか申し上げづらいというような状況であるということでご理解いただきたいと思います。

(中村委員長)

よろしいでしょうか。

ほかにございますでしょうか。

(丸山委員)

さっきの、問題について今後検討というような言い方なんですけど、県会の関係ね。ちょっと法律上というか条例上よくわからない点もあるので、きちんと県民にわかるように説明してほしいんですが、少なくとも設置条例は校名が載っていますので、それは新校名になれば、変更はない、あるいは新しい校名ができればその条例は変更しなければいけないですね。

それから廃止になれば、廃止したものは削らなければいけないですね。それから今の話では募集定員は県教委でやっているということ。県会には報告するんだろうけど、そういう権限がありますね。

その権限からいって、今までの慣例というか決まりというか、そういうのがあると思うんですが、県会の条例とか規則とか法的なことで、県会をきちんと通さなければいけないというのは何なんですか。

例えば今言った、校名の問題ね。統廃合問題、廃止の問題、募集停止の問題ね。そういう問題について、あるいは募集定員の問題、そういうのは県会の関係はどうなっているのかということは、きちんと説明してほしい。

いつ、どういうふうにやるかというのは、ほかの県でもいろいろあるって言うんだけどね。それは私さっき言いましたけど、私はそう思っている。特に新しい校名も、決めながら募集定員とかね、募集もしていかなければいけないのに、それは既成事実をつくってから後で県会でどうだという話もあり得るということ、これは認識的にいって問題だと私は思う。これは私の個人的な意見ですが、条例上の説明はちゃんとしてください。

県教委の権限と、県会に報告、ちゃんと決議すべき点を整理してください。

（吉江高校教育課長）

県のほうで、県議会に事件案というようなことでお出するものがあるとすれば、それはいわゆる条例案でございます。それで先ほど申し上げましたように、条例案について申し上げますと、よその県におきましても最終的なC校というようなものを立ち上げるのに、1年目なり2年目の途中において条例案を上程するというような形もありますので、その辺については今後検討ということをお願いした次第でございまして、募集定員の決定とかそういうようなことについて、県会でご審議をいただくような形にはなっておりません。

具体的に、須坂高等学校や岡谷工業高等学校の場合には、これは定時制ではございますが、募集定員の、いわゆる定時制の廃止というようなことを行ったわけですが、それは16年から募集停止をかけましたけれども、それにつきましても県議会の事件案等でご審議いただいたというような経過はないという状況でございます。

（小山（壽）委員）

いろいろなケースであると思いますので、一律にはやらないでいただきたいと思うわけです。これがまず一つです。一律にというのは、18年度の1年間で新しい学校の校名を決めなければいけない。しかもひょっとして募集絡みだと、6月県会にかけなければいけないというようなことになると、もうそれ以前に、例えば18年度の4月あるいは5月の頭ぐらいまでに、新しい校名を決めなければいけないということになるんですよ。

非常に検討する期間が短い。当然、新しい校名を決めるということになれば、地域の皆さんがどういうふうにお考えになっているのかということ、当然考えて新しい校名を付けていく。そうすると当然地域の方のお考え、などを把握するのに一定の期間が、また必要になってくる、そんなふうに思います。これが一点。

ただし、今3年目で、完全に新しい高校ができてから、新しい校名が出てくるというようなことであると、これはこれまで何遍も、これは統合で、A校とB校が一緒になって新しいC校ができるんだと。言っている趣旨にちょっとやや反するだろうと。

つまりA校がB校を吸収する。B校は募集停止をかけられて、廃校になっていく。というような印象を、非常に強く持たれるわけです。やっぱりそういう事態は避けるべきだろうというふうに思うわけです。

そういう意味で、地域の意見を聞きながら、しかし3年目ではなく、その1年目、2年

目の中で地域でまとまってきたら随時教育委員会のほうで県議会にかけていく。これは先ほどの青木委員さんの、お金絡みの問題はこれはまた別で計画を立ててもらわなければならないんですが、ぜひそんなことをお願いしたい。一律にやらないでいただきたい。

それから2つ目ですが、新しい学校をつくる時には、だいたい開設準備室というようなものができると思いますが、今回の場合にはA校にもB校にも教員はいるわけですね。従ってひょっとすると開設準備室というようなものを設置する予定はないのかもしれませんが、1年間の中で教育課程や新しい学校のありようやらをまとめていくというよりは、かなり時間を割かれる。

通常の授業やクラブ指導をやりながら片手間にやれる問題ではない。ぜひ新しい高校を設置するための開設準備室というようなものについても、ご検討いただきたい。そんなふうに要望をいたします。

（中村委員長）

ただ今のご議論、質問絡みのご議論では、条例それから県議会との関係と時間的に大丈夫かというところは、事務局のほうはやろうということです。それから今、小山（壽）委員からご指摘いただいているようなことは、要望としては推進委員会の報告のほうできちんと書かせていただくということでお願します。

ほかにございますでしょうか。

（森野副委員長）

募集定員と再編の問題であります。例年一次募集、満たない高校というのは出てきますよね。私とすれば、中学生全員入学と二次、三次というような形で全員入学を希望するわけですが、もしも満たない学校というものが、ここ何年間、3年、4年、あるいはまた来年度というような形で出てきた場合、それが再編計画の材料になるのかどうかということをお聞きしたいわけです。

（中村委員長）

事務局、お願いします。

（吉江高校教育課長）

今、森野委員さんからご指摘をちょうだいいたしましたように、各年度におきまして私も募集定員につきましては、かねてより申し上げておりますように、私学と公立の関係のバランスを見ながら卒業生を受け入れられるような、前提でそれぞれの地区ごとには策定していく次第ではございます。

ただしかしながら、それぞれの学校におきましてある程度募集定員に満たない学校が現にございまして、今は二次募集というようなことを、行っております。二次募集ということは、今後も当然仮に再編整備が進んだとしまして、二次募集はかけてまいりたいと思っておりますが、ただしかしながら今後、今現在はさておきまして、89校体制が変わった場合にいわゆる定員を満たないような学校に対しまして、今後も統合の議論をしていくかということは当面考えてはおりません。

しかしながら当然のこの報告書にもございますように、例えば最低2学級という定員の学校が今後もできるとすれば、その2学級の学校につきまして十分生徒さんが集まるような学校としての位置付けを、何らかの形で考えていかなければいけないとこのように考える次第でございます。

(中村委員長)

ほかにございますでしょうか。

(若麻績委員)

募集停止をされた、学校のほうの学校のスケールのことと関わってくるわけですが、その中で非常に配慮しなければいけない点として、教育環境、それから行事・クラブ、それぞれあるんですが、その中でやはり例えばクラブを取ってみると、クラブがだんだん小さくなっていくという中で、A校、B校との活動の共有制を持たせるといような表現をされております。

例えばインターハイとか、そういったときの在り方というのはどのようなことが考えられるのか教えていただければと思います。

(吉江高校教育課長)

野球でいいますと高野連、それからほかの競技でいくと高体連という組織がございます、高野連や高体連におきましては、合同チームの編成ということを認めております。さらに以前平成7年ぐらいですか、高野連のほうで全国に通知を出した経過がございます、高校の再編整備ということが全国的にも議論が進む中で、高野連としましても、高野連もある意味規定が非常に厳しい面があるんですが、それぞれの学校のひとつの再編整備計画に基づいての学校であれば、2校なり、極論を言いますと3校なりが一緒のチームとして、県の高野連が認めるのであれば、それで極論を言いますと甲子園出場までオーケーだといようなご通知をいただいている経過がございます。

そんなことがありますので、そこには支援しているとか、交通手段を支援しているなどの表現をさせていただきますが、まさしく適宜生徒さんのご要望等を受けまして、ある程度の規模のクラブ活動が必要なものにつきましては、特段の配慮をしていくようなことを考えている次第でございます。

(中村委員長)

よろしいでしょうか。

ほかにございますでしょうか。

またありましたら、途中でも結構ですので出していただいて、ほかに資料の説明について質問等ありますでしょうか。

(丸山委員)

ちょっと委員長さん、事務局もそうですが、要望しておきたいんですが、意見も含まれますけど、地域からの提案を募集するというこれですが、提案内容のところはかなり限定されているんですね。

現実に私のところにいくつか質問や意見がありまして、再編整備候補案を否定しただけのもの、高校の存続を求めるだけのものでなく、具体的な提案内容、とこのように記載してありますね。これはある程度こういう書き方はしょうがないなという思いもありますが、前回のときに私のほうで要望した意見を申し上げたわけですが、対案という言い方がされていましたが、対案にはいろいろな内容がありますので、再編整備候補案について、否定してあるからだめというような硬直した態度で選ばないでほしいなと思います。

否定はしているけど、ちゃんと分析をしていると、統合しないでほしいということについて、それはこういうふうになる状況を考えられるのでこうだというふうに、ちゃんとあるものについては、ちゃんと聞くべきだと私は思っています。

というのは前提として、再編整備候補案に指名された学校や地域が、対案を出す責任はないわけです。県が、たたき台として出したわけですから。たたき台と言っちゃいけないんですけど、検討材料として出したわけですから、それは一方的に出したわけですから、それは対案を出す責任はないわけです。対案を出さなければだめだよ、つぶすよという話はないわけですよ。

だったらちょっと変な言い方で申し訳ないけど、別に言い掛かりではないんですが、全校を対象だよというふうに検討委員会では言っていたわけですから、だったら全校で、あなたのところが廃止になったら、統合になったらどうですかという意見を全校から聞いて、ちゃんとした意見を出るところだけは残すというのはまだわかりますけど、指名された学校や、指名された地域が対案をきちんと出せ。しかも対案は、どこかの学校名をちゃんとほかのところへ出せという話では、ちょっとおかしいわけで、この提案内容についての限定を私を前回の議論で私もそういうふうに出したときに、それに対して反論はなかったもので、そんな方向でまとまるのかなと思ったら、かなりの限定なんですね。

そうすると何と言いますか、対案を出さなければだめかなみたいな話とか、あるいは関係した、直接関係した学校とか、関係した地域だけしかだめだというような話になってくるので、一応幅広く意見を聞きながらということですから、ここへ出た以上は、これを否定するわけにはいかないの、あまり硬直した考えでこれを選ぶということはしないでほしいと思います。

(中村委員長)

ありがとうございました。

「個人的な見解や」というところなんですが、できればできるだけ多くの方に推進委員会において、我々が気付いていないようなところをご指摘いただきたり、ご提案をいただきたいというのが趣旨でございますので、お一人お一人の発言が多くなりますと、それだけそれぞれの時間が少なくなります。推進委員会の時間が限られています。

ですのである程度まとまったご意見をいただきたいということで、こういう表現になりました。それから対案を出せとはどこにも書いてないんですが、ご提案をいただきたいと

ということです。これは単純に高校存続というのを求められましても、我々の議論はそこをしているわけではなくて、魅力づくりやよい配置ですね。これからの高校教育についての議論が推進委員会に任されたところですから、それに資するご提案であったほうがよいということで、こういう内容になります。

多分事務局の今までのご経験から、あまりオープンにしますと収拾がつかなくなるというご心配もあったんだと思います。私も相談を受けまして、こういう表現になりました。それからあとは、幾つかの個人の方から、あるいは団体の方から、既に事務局のほうに申し込み、それからこういう提案ならばいいかというようなこと、相談を受けているそうです。

それから私のところにもメールで、非常に厳しいハードルのようなものを設けてあって、ガッカリしたというのを今日いただきましたが、言っていればどうという提案なのかということで、提案内容を審査のうえというところは、十分提案者の意をくみまして採用していきたいと思っています。

ただしやはり少し制限をしないと、推進委員会の議論の時間がなくなってしまいますので、そういう趣旨でこのような表現になりました。決して制限を厳しくしているというわけではございません。できるだけオープンにしながら、ということでこういう表現にしたんです。ご理解いただきたいと思います。

事務局、何か補足をいただければ。

（三澤教育支援主事）

今、委員長さんにいただいたとおりでございまして、趣旨として個人的見解でなく、団体等で審議された、検討されたというもので推進委員会のこれからの検討に役立てていきたいという趣旨でございしますので、その辺ご理解をよろしくお願いしたいと思います。

（中村委員長）

よろしいでしょうか。

ご提案をお待ちしておりますので、ぜひご意見のある方はお願いしたいと思います。

ほかに、資料説明のほうは、それではよろしいでしょうか。

続きまして、地域からのご意見等お聞きになっていることがあれば、情報提供いただきたいと思います。私のほうから先ほど漏れていたのか、事務局から意見書が来ているという中に、原村がございまして。これが30人規模学級を導入しということで、文面はほかの町村とほぼ一緒の内容でございまして。これが来ています。諏訪郡原村議会議長さまから、推進委員長あてに来ています。

それから高等学校教職員組合執行委員長中島さんから、今後の推進委員会の進め方について声明ということでいただいております。これは皆さんにも推進委員殿ということですから、来ているかと思うんですが。地域の議論が始まっているので、無理な結論をまとめることなく、地域の合意を得られる議論を展開することを求めますということです。今日行っていこうとしている議論がまさにこのことだと思います。

それからもうひとつ、定時制、通信制高校の在り方を考える長野県ネットワークから、推進委員各位ですので、推進委員さん全員に行っていると思うんですが、アンケートの

集計結果です。定通制高校に通う 434 名から回収したアンケート結果ということでいただいております。

以上ですが、ほかにございますでしょうか。

青木委員、先ほどご発言いただけるということでしたが。

(青木委員)

第 9 回の推進委員会の開催の後、中野の地域で起こっている動きをご報告等させていただきたいと思います。13 日でしたが、実は中野市内高校の在り方を考える市民会議というものを開きたいということで、今その実行委員会組織がいろいろ学習を重ねているところであります。

その中で例えばお隣の新潟県の、もう既に歴史を積み重ねつつある総合学科高校を現地視察をさせていただいたりしながら、13 日に会議が、当実行委員会が開かれたわけですが、けれども、そのときにはその視察の報告、また塩尻志学館高校設置する際、いろいろご苦勞なさり、またその後の経過等しっかりと目配りをしていくと、くださる立場の方のお話を聞くということも、合わせてさせていただいたようであります。

そしてその学習会を積み重ねながら今日まで二度、三度ほどの会合を開いているようであります。最終的には、この第一推進委員会で地域の意見を聞くという、そのスケジュールに合わせて、地域の意見を集約しようということまで、今差し掛かってきているように聞いております。

そのためにも、いよいよ当初の目的でありました中野市内高校の在り方を考える市民会議の開催の準備まで、今到達しかかっているということでありまして、そこで案として地域の考え方を、集約された考え方をご提示し、多くの方々にご賛同をいただきましたら、それを基にしてこの推進委員会で意見発表するという方向で今、進んでいるようであります。

以上です。

(中村委員長)

はい。ありがとうございました。

ほかにございますでしょうか。

(小山(壽)委員)

推進委員の方々にはお配りをしてありますが、本校の同窓会『桂蔭会』という同窓会がございまして、この同窓会で 6 月以来飯山地区の高等学校の将来について検討されてきております。

6 月の 9 日に、同窓会の臨時総会を開きまして、特別委員会を設置するというので、第 1 回の特別委員会が、6 月 22 日に開催をされております。6 月 22 日というのは、非常に微妙な日程でありまして、県の再編整備候補案が発表されたのが 6 月 24 日のことあります。その直前であったということです。

当初から飯山北高校の同窓会では、「北高を残してほしい」という議論はしないようにしましょう、そういうことではなくて、この飯山地区で将来的にどういう高校があるべきか

ということを考えていきたいと思いますということで、今まで7回ほど開催をしてきております。

10月に代議員会、そして同窓会の総会がございまして、その総会でこの中間報告ではありますが、中間報告として承認をされたということで、今日本日は皆さんにお配りをしてございます。

また11月に予定されている、地域からの意見発表につきましては、同窓会長あるいはこの特別委員会の委員長、どちらかが出て意見・要望を出したいというように考えているようです。

同窓会としては、飯山北高校、飯山南高校、飯山照丘高校、この普通科3校については、それぞれの理数科、体育科、そして照丘高校が今行っておりますコース制を十分に生かしながら新しい学校をつくっていききたい、これが1点目であります。

飯山地区には4校ありますので、新しい学校は下高井農林高校と学校間連携をし、そして相互に授業を交流させる中で、将来的には下高井農林高校も統合をしていききたいというように考えています。

最終的にこの年次は、非常に難しいものがありますので、はっきり今のところ察することとはできないわけですが、将来的には飯山は1校でいい、こういうふうを考えております。当然その中で、非常に幅広い学力の生徒が集まってまいりますので、理数科、体育科というだけではなくて、照丘が今実施しているコース制を十分取り入れて、幅広い学力の生徒に対応していききたいということでもあります。

またでき得るならば、新しい学校には中高一貫の併設型の付属中学を設置したい。そして地域の方々の次の世代のリーダー、その併設型中高一貫校と新しい高校とが協力することによって育成をしていきたい。こういうような内容の中間報告であります。

別紙をちょっとお読みいただくとおわかりいただけると思うんですが、例えば一番最後ですが、その可能性を地域を挙げて検討するべきであるというようになっています。これはもともと元来が、再編整備候補案なるものが出てこないという前提の中で特別委員会はスタートしております。

従いましてこの中間報告は、県の教育委員会や推進委員会に対して行ったものではなくて、特別委員会が同窓会長に対して行う中間報告でありますので、文章はそういう意味では推進委員会向け、あるいは教育委員会向けになっておりません。

しかし本校の同窓会としては、中高一貫教育併設型を含む飯山地区の高校の将来像について、このように考えている。現段階でそういうようなことが、総会、代議員会で承認されましたことを、ここにご報告を申し上げます。

(中村委員長)

ありがとうございました。

ほかにございますでしょうか。

(小山(元)委員)

今、飯山北高の小山校長さんのほうから、北高の見解についてのありがたいひとつの方向を研究の成果が出ているわけですが、実は前回までもお話し申し上げました、飯水岳北地区高校の将来を考える会は、これとはまた概要が似ているところがございます

けれども、それを踏まえながらの全体の地域の声を取り上げて、今、考えているところで、今月の下旬か来月の初めあたりに一応方向が示され、最終的に支援する方向に持っていきたいと思っております。

そして4日までの期限に対しまして、またお願いして発表する機会をいただけたのですが、その飯水岳北地区高校の将来を考える会の中の桂蔭会もひとつの団体でございます。そのようなこと、それぞれのところでほんとに一生懸命地域を挙げて考えているということ、ご理解いただければと思いますが、そのようなところで報告させていただきました。

(中村委員長)

ほかにご報告等ありますでしょうか。

よろしいですか。

無ければ議事のほうへ入って行きたいと思います。

冒頭申し上げたとおりであれば具体的な議論を。今までも幾つかしていただいているんですが、少し議論を急ぐわけではございません。集中してやっていきたいという意味で、今日は第1、第2旧通学区で、総合学科の配置、それからそれに絡めて職業科の在り方、それとももちろん職業科と考えますと、坂城も多部制・単位制の中に地域連携として絡んできますが、できるだけ具体性を持ってやりたいということで、第1、第2通学区に限って議論を進めたいと思います。

今日早速地域からのご要望を、次回ですか、ホームページにアップした募集に関して応募いただいて、発表いただけるというところを中野、飯山地区でいただいていますので、これを待って我々が議論を進めるというよりは、あらかじめ推進委員会である程度の議論を進めておく必要があるかと思えます。これは中沢委員が以前おっしゃっていた「地域の要望を聞くのもいいが、推進委員会での議論を深める必要もある」ということでしたので、それに少し従っていききたいと思います。

こういう方向でよろしいでしょうか。それにつきましては、やはり県立高校再編整備候補案、第6回にいただいた資料1が議論のベースになるかと思うんですが、どういたしましょう。前回に少しスタートした総合学科と職業科の関係のところから、スタートしますと中野の関連のところかというふうに思いますが、この辺でご意見をお出しいただきたいと思います。

それから一番は再編後のイメージですね。このあたりが、書かれていることがほんとに実現可能なのか、あるいは地域としてはこういうことで魅力づくりとして十分妥当なのかといったようなご意見だろうかと思うんですが、その辺でご議論をよろしく願いたいと思います。

資料はお持ちでしょうか。候補案についての事務局の説明の文章、事務局から提出していただいた候補案の説明の文章です。

(丸山委員)

私のほうでは、幾つかの意見を持っていました。ほんとは資料を出そうかと思ったのですが、どんな議論が出てきたら、あるいは出た後でというふうに思ったのですが、たくさんありますので全部は言いません。そのうちの幾つかを言います。

ひとつは前回の最後のときに、私が言いましたけれども、4人の企業の方から工業科が無くなる場合の問題についてご意見がありましたね。あの文章について私は前回も最後にちょっと言いましたが、私は素人ですけど、素人なりに考えて、今のような産業状況の中で、ああいう苦しさといいますか状況があると。

あるいは場合によっては、今の高校の工業科と産業界とのずれもあるということもわかりますので、ああいうご意見だというのはわかりますが、あの意見を単純に工業科はいらないというふうにとらえることは間違いではないか。地域に行って、県教委の事務局がそういう説明をしたらしいですけど、そういうふうに取り取るのは間違いだというふうに私は思います。

今は無くなったとしても、たとえ無くなったとしても、ほかの手はあるとか対応はあるとか、あるいは実際の採用は工業科だけ採用しているわけじゃないとかいうふうな意見はありましたが、その中に基礎、基本についてきちんと学んでほしいというようなことです。工業の基礎を学んでほしいということや、やっぱり学んできた子たちは意欲もあるし、伸びるのが早い、飲み込みが早いというご意見もあったわけです。ただ「このような工業科でこういうふうにしてほしい」というのもあったわけです。

そういう点では、工業科が長野地区の統廃合の問題としてなくなるということは、私は前から言っているように、ものすごく大きなことだと思うんです。北信全体のこの広域の中で、長野工業だけでいいのかという問題は真剣に考えなければいけないんじゃないかと思います。

参考ということで、私のほうに手に入った資料がありますので、少し前といいますか昨年ですかね。これは昨年の多分9月ごろだと思うんですが、教育委員長あてに長野県工業教育研究会というところから、これは長野工業の当時校長さんですか、会長になっていますが、その中に安易に総合学科ということではなくて、安易に総合学科に盛り込みはせず、地域性を考えて生徒が通学できる範囲に工業科を有する学校があることが望ましいというような要望が出されていましたね。

そのアンケートですね。工業教育に関する企業、165社へのアンケートというので、やっぱり専門教育、もちろん基礎教育も含めた専門教育をやってほしいと。きちんとやってほしい、工業についての専門教育ですね。それをやってほしいというのが33パーセント。

基礎教育も含めてということになると、合わせると60パーセントを超えるわけです。そういう希望があるということや、それから専門教育の充実の中身ですけど、やっぱり実験、実習、基礎理論、こういうのをきちんとやってほしいというようなことです。それからもうひとつは、今後の採用計画というようなことで、企業の皆さんに聞いたところで、工業高校卒業生が必要となるので現在よりも多く採用したいという、ますます必要だと考えるのが17パーセントですけど、現状を維持してほしいと。現状と変わらない見通しだという状況は、58パーセントもあるんですね。

そういう点では、こういう状況の要望を昨年教育委員長あてに出ているわけでして、ほ

んとにこの北信地区で、工業科が長野工業だけ1校ということで、私は素人ですけど北信の産業、工業はほんとにいいのかといことは、もちろんそれは前にも言いましたけど、今の工業科の内容がすべていいとは私も考えていません。それはその状況にあったような、あるいは基礎、基本をきちんとやるとか、もっと状況にあったような内容、改革が必要ですけど、そういうことについてはもう少し議論をしてほしいなというふうに思います。

それは私は総合学科では、前に最初のほうで資料を出しましたけど、そういう工業科や職業科に代わり得ないということは、非常に大きな問題だと私は思います。

(中村委員長)

はい。今の工業科をより良くする方向というのと、それから新しいシステムである総合学科の中で工業教育、職業教育ということで、それをうまくやっていく方向を計画するかどうか。その辺だというふうに私は思います。

ほかに何かご意見はありますか。

(牧 委員)

丸山委員さんからお話があったように、私どもの企業も実際、実態報告ということでレポートさせてもらっているんですが、現実的に高校も大学も一緒なんですが、学んだことをすぐ職場で生かすということとはなかなか難しいんですよ。ですから、それは一緒だと思うんです。

私も実業高校の、地域における実業高校の大切さというのはわかっていますが、今の実態を見ますと、ほんとに魅力ある学校になっているかということになると、ちょっと疑問の点がありますね。

前から言うように、私はやはり総合学科と昼、夜の多部制・単位制ですか。そういう学校の論議が中心なんですが、高校教育の中で普通高校のレベルアップというのは私は一番大事だと思っています。

多種多様な人材を確保するために、企業もそれぞれ努力して地元の生徒を、それぞれ地域の中で採用しているのですが、前にお話ししましたように、実業高校の機能がそれぞれの実業界に反映されているかとなると、なかなか難しい点があるんです。

商業高校に行っている人が、ほんとに商業に関係する、サービス産業だとかそういう方面に行っているか。あるいは事務系、会計、経理だとか、あるいは販売だとか、そういう関係の職種に従事しているか。あるいは職種に従事しているかとなると、そうでもないんですよ。

須坂にも農業高校があるんですが、須坂の農業高校の生徒たちはどういう企業に行っているのだろう、どういう職場を選んでいるのだろうということを、統計的に見ますと第二産業が結構多いんですよ。

本来であれば、農業大学校も地域にありますし、工業試験場もありますし、いろいろな面で一次産業に従事するような、せっかく学んだ勉強を、そういうところに生かしていただければいいんでしょうけど、実際は車の整備士であったり、あるいは工場のオペレーションのワーカーであったり、いろいろしているわけです。

ですから、工業高校は、前にもお話ししましたが、非常に職場にとっては魅力のある

そういう工業高校なんです、今日の生産設備といいますか、そういうものの実態を見ますと、非常に高度化されておりますし、システム化されておりますし、コンピューターで制御するような、そういう機械もほとんどですね。

手で作業する仕事は、ほとんど海外へ行っておりますし、違う言葉で言えば、労働者の産業は海外へ。開発あるいは技術の高い、あるいは固有の技術、伝統技術、そういうものは国内へ残るというような状況の中でありまして、求める人材がはたして民間の企業あるいは公的な機関に、本当にいい面に入っているかとなると、そうでもないような状況かと思えます。

ですから私はやっぱり実業高校も、時代時代の流れによって、社会の仕組みの中で、やっぱり変えていく必要があるだろうし、変わってほしいというふうに思っております、ですから総合学科がどういうカリキュラムを組んで、どういう生徒を募集して、どうなっていくかということは、まだ具体的には私はよくわかりませんが、いずれにしても産業界といいますか、そういうものも考えた中で教育カリキュラムという、ぜひ採用していただくような内容になってほしいなというふうに思います。

それは大学と別です。大学と別ですが、そういう内容の評価といいますか、そういうものもぜひ取り入れていかないと、今の実業高校、あるいは工業科がいかにかという状況の中では、ちょっと非常に寂しいようなことになるかなという感じはしております。

ですから、総合学科がどういう科目を取り入れてやっていくかということが大事なかなと思います。塩尻志学館の問題を見ると、進学校みたいな形になっているというお話ですが、その辺がそういう形になってくると、この飯山、中野、須坂、この辺の地区を考えると、中野実業高校が無くなるというのはちょっと寂しいかなという感じはします。

(中村委員長)

候補案の説明の4ページには、もう皆さん重々承知のことだと思いますが、中野実業高校の専門教育の施設、設備が既設であることから、こういうものを活用していくということです、当然普通科目以外で商業科目を取り入れながら実技、実習を取り入れていくということです、いわゆる工業のセンスとか商業のセンスというものを若い時代に触れていくというのは十分だと思いますし、それから坂城のほうも地域の製造業との連携などの実績から、講義中心の授業のみでなく、体験的な学習ができることを魅力としていくということが述べられています。

これは多部制・単位制に限らず、多分普通科でもこういうことをやろうと思えば、できると思いますし、こういうことは候補案の中には述べられていると思います。後ほど私のほうからまた申し上げますが、他にいかがですか。

(塚田委員)

先ほど丸山先生のほうからお話がありましたが、聞き取り調査等をさせていただく中で、それから自分自身も会社経営を行っている中で、資料にも書いてあったように、職業高校、実業高校を出ているから、即社会に出て通用するということは残念ながらありません。

こちらに高校の先生方がいらっしゃっておわかりだと思いますが、極端な例はあいさつから教えていかないと使えないというようなことも、実際あります。ですのでやはりどん

なに実業高校を出ても、やはり会社で一から教育をし直さないとならないという現実があるんで、ただやはり今丸山先生がおっしゃられるように、工業科出たからやはり志は違うと思いますし、今、委員長が言われたようにセンスも違うと思います。

やはりこの4ページの再編後のイメージというところを読ませていただくと、情報とか工業とか商業と、幅広い選択肢を用意しているということなので、丸山先生がおっしゃるように今の工業科と、これがそっくり通用するものかどうかはわかりませんが、委員長が言われたように、そのセンスとか志とか、それは受け入れてくれるんじゃないかと思えますし、それを伸ばすことのできる内容にはなるのではと思います。

そこを出て、社会に通用させていくには今度我々の守備範囲になりますので、その辺は心配をすることはないのかなという感じはしております。

(中村委員長)

私は、前回申し上げる時間がなかったのでここにメモを元に説明したいと思いますが、大学の話です。

大学も今4年生で卒業して、私の場合は工学部ですけれども、多くの企業さんに採っていただいています、即戦力ということはなかなか難しいかなと思います。やはりそれなりに訓練を受けて、試用期間を経て、オン・ザ・ジョブトレーニングを受けて実務についていく。

それ以後もやはり先輩から技術を学んだりしていく。特に実技のほうですね。実務のほうはそういう状態です。さらに最近は6年一貫教育という考え方も、非常に強くなってきました。それは学部4年と大学院2年間、合わせて大学教育をしていく。

今までの大学教育というわけではございませんけれど、6年間ぐらいかけて専門教育をやっているのではないかということで、これは既に私の大学では6割ぐらいが大学院へ進んでいます。全学科平均して6割ぐらい。多い学科ですと8割とかという、相当な量になります。

こうなりますと、産業界から大学院の教育の質の低下というような指摘も受けます。しかしながらやはり、広く知識を得ながら、研究というようなことを通しながら、実務を学習していくには、それぐらいの期間がかかってしまうというのが現状です。

それは大学への入学者の数が、非常に多くなったとことも一つの原因です。その中で、では大学は即戦力の人材を供給していこうと考えているかということ、工業の場合に限って申しますと、高度な設備や計測機、加工機、そういうものを大学に設置して、それを使えるようにするという、手先の能力ですね。そういうものを訓練しようとしても、無理があります。

1台数千万円するような、NC工作機械なんかを入れていくというのは、まず無理です。ですのでできるだけインターンシップのようなものを取り入れて、外部に教育力を求めてやっていこうということです。

学生も積極的に、自分にはそういった高度な機械を扱うとか、そういう技能の経験がないからということで、企業に行こうとしています。徐々にインターンシップを推進しています。単位にもなりますし。

ですからこれは高校でも言えることだと思うんですが、実務をきちんと即戦力で鍛える

というよりは、工業的なセンスや、ある程度の経験、物作りの経験等を、その場で基本を学んでおく。それから科目、知識の集約もしておく。それから勉強の仕方等ですね。一生勉強しなければいけませんから、自分にあった知識の吸収の仕方、技術の付け方を学ぶのが学校の役割ではないかと。

その中で地域の協力も仰いで、実務を経験していくというところが非常に大事だと思います。すべてを経験することは、これは不可能です。ですから机上の科目を学ぶという場はぜひ必要だというふうに思いますので、その辺のバランスですね。実務を経験させていただきながら、それを自分の学ぶ動機付けとしても使っていく、これが非常に大事な学校の役割ではないかというふうに思います。

（塚田委員）

今、委員長が言われたようなこと、大学で見ますと例えば今、金沢工業大学というところが、非常に就職率も高いですね。そういうことでは、委員長が言われたことが学校でも認識されているのかなという感じがします。

それから即戦力ということでは、例えばトヨタ自動車で行っている豊田工業大学ですが、あの辺もそういう意味では、委員長が言われたようなことを実施されている。だけど学校は学校でそのような努力をしているということは、努力があつてこそそういう魅力が生まれているんだということで、やはりそういった状況は、やはり丸山先生が先ほど来言われている高校での実務教育と言うんですか、そういうことでもやはり考えていかなければいけないことではないのかと思います。

（中村委員長）

そうですね。あいさつもできない、大学生もそうかもしれないんですが、ある程度コミュニケーション能力を高めていくということで、そういう集団の教育というのも大学では力を入れていますし、やはり総合的に世の中の仕組みを学びながら、専門、興味、関心を持っていくというのが非常に大事かと思います。

総論になってしまって、各論にならないのがいけないのですが、こういう今のようなことは、やはり中野地区でできるというふうに私は考えています。その辺どうでしょう。青木委員、もしよろしければご意見をいただきたいと思います。

（青木委員）

例えば実業系の具体的な例が出ましたけれども、例えば統合のひとつの学校であります中野高校では、郷土の時間というようなことで地場の企業、産業のほうに飛び込んで行って、実務体験、実務経験するというのは結構人気のあるコースとして、子どもたちは取り組んでいるそうですね。

ですからもしこの県教委の提案が進んでいけば、そういったシステムだけは残していかなければいけないことだなと思います。

それと今、ちょっと発言のチャンスがありましたので、ちょっと違った部分でお話しさせていただきたいと思います。

先ほどの牧委員さんがおっしゃったことと一部重なりますが、私も実は基礎学力をやっ

ぱりきちっとレベルを上げるという基本姿勢は必要なことであると思うんです。ですから前々から、この総合学科の説明を受ける中で、1 年間は必修科目をしながら、オリエンテーリング、担当の先生とともに、2 年、3 年の2 年間、どんなカリキュラムを自分なりに組み立てていくかということ、1 年間かけてするという話でありましたけど、例えばそれを2 年間ぐらいかけて、もうちょっと基礎学力をアップしながら最終年度の1 年間にさらに迫って、奥が深いところに学習を深めて行かれるかなんてことも、ひとつの形態として許されるならば、さらに基礎学力のアップを図れるのではないかと思います。

また基礎学力をアップすることによって、ある程度専門性を持った上の専門大学なり、要は進学をするというような挑戦意欲も子どもたちが出てくるのではないかと。またそういったものを受け止められるようなシステムをつくっておくことも、大事ではないかというならば、純粹の進学校ではないまでも、進学を目指すものにも対応できるものを地域の総意としてまとまるならば、そんなものも提案するなんてことも、声として一部挙がっていることも事実であります。

そんなことで、結構ひとつの固まった総合学科のイメージから、バリエーションを膨らませた、事例は何があるかわかりませんが、地域の個性を強調するような、主張をするような、そんな総合学科ということも許されるならば、ちょっと夢を広げてみたいなという思いもあります。

(若麻績委員)

多様化している子どもたちを受け入れるという、ひとつの大きなテーマが、今回の再編整備にはあるわけで、その中では重要なポイントである総合学科だと認識しております。その中でやはり第1 通学区の中の皐月高校が、既にもう市立校として長野市内総合学科に転換するように決めているというのは事実でございますので、やはり北信の中で、もう少し北のほうにということを考えていると思います。これはあらゆる子どもたち、その多様性に対応できる可能性を広げてあげられるのではないかと思います。

そういう話の展開の中で、やはり青木委員さんのからも、中野の市民会議というのが、非常に機能して前向きに考えておられるようなことを先ほどちょっと述べられていましたので、やはり魅力をつくっていくという観点の中で、地元の方々が一生懸命考えておられるということに対して、「このようになってほしいな」と思う気がします。

それで丸山先生から以前いただいたプリントの中に、一番最後のところに、やはり総合学科そのもの、今の現状の中で問題点というのはあると思うんですが、それはやはり明らかにしたところに対して、これは評価されるんだと思います。それと同時に、これからつくる総合学科として、ここに地域と学校が主体的にその内容を決めていくべきだというふうに述べられていることがあるので、やっぱりこれも今、大変重要なのかなと思います。

工業、商業についても、地元でこれをどのようにポジショニングを決めていくのかということは、ここでももちろん議論はしておりますけれど、そもそも地域の主体性というものを前に出していったらいいなと思っています。

(中村委員長)

ありがとうございました。

(中沢委員)

今、工業科の話から、いろいろ議論が深まっていますが、それを産業全体にとらえるというように考えると、工業科とか農業科とか商業とかということで従前のような形があると思います。

そうした中で、最近のニーズの多様化、少子化、高齢化等を考えると、福祉とか環境とか、あるいは観光とか、そういった面までもひとつの職業教育であり、産業教育かなと、こういうふうに思うもので、その辺の見直しというか、方向性も大事だなと思います。

そして子どもらを教育する上においては、その方向として進学試験コースだということは、それはそれとしてしっかりさせなければいけないし、そうした中で高校から、あるいは就職するという面、あるいは大学へ行く人に対しても産業観というもの、職業観というものをしっかり身に付けさせなければいけないと思うわけでございます。

そしてまた、長野県で教育しているんだから、地域への関心を常に高めておく。そうするとそんなような前提の中で考えると、例えば専門的な学校というものについては、進学校は進学校を1つ置くとして、専門的に工業なら工業、農業なら農業というのは、地区に1つぐらい、もう少し専門的なものが必要かなと思います。

ただ総合学科というふうなお話も出てきているので、そうしたところの組み合わせの中で、ある面の産業教育あるいは工業教育もできるかなというふうなコース分け。そしてまた普通高校においても、どちらかという進学よりもその地域の一般的な教養を身に付けながら、職業を選んでいくというような学校については、その中における職業教育、地域と相まって職業教育を充実していくというようなコース分けを、仕組みづくりをしっかりとさせておかないと、常に工業、こっちに有ってもいいし、こっちには無くてもいいというふうなことになるがちなもので、そのためにいろいろと総合学科というふうなこと、ここをより高めていくというふうなことにすればいいんじゃないかなというふうに思います。

(中村委員長)

ありがとうございました。

丸山委員がご指摘の、長野工業だけでいいのかというのは多分、長野工業だけにはならないですね。職業教育、工業教育は長野工業だけにはならない。

やはり人口の多いところに、長野工業、長野商業という少し大きな高校がございますので、その配置に関していえば若麻績委員がご指摘いただいたとおり、北のほうに少しよったところに1校配置していけばいいのでは、ということだと思いますが、丸山委員、いかがでしょうか。

(丸山委員)

心配し過ぎと言われるかもしれませんが、ひとつは工業科を言っているんですね。確かに、県のほうの最初のころの考え方のマスタープランの中には、地区で1校、2校集中しちゃうでしょ、職業高校は。そういう考え方がありましたね。

その流れからいけばそういう議論なんだろうけど、私は基本的にそれでいいのかという思いがあるわけです。だから農業科もいずれ、また一校になっちゃうという、商業科も一校になっちゃうと。そういうことでいいのかなというのが、どうしても疑問があるんです。

特に工業の問題は、私はまったくの素人ですけど、何と言いますか確かに今の高校の工業科の中身がいいとは思いません。前にも言ったけれど、何か少し産業界に合わせて、何か片仮名の名前のようなものをいっぱいつくって、農業もそうですね。そういう多様化の小さな学科をいっぱいつくって、産業界に合わせてようとして改革したけど、そんなはもう産業界の進展のほうが多くて追いつかないんですよ。

だからもっともっと基礎的な、例えば私素人ですが工業でいったら物作りの歴史ですね。すぐに企業に入って役立つかどうかというのは、もちろん今の状況ではあいさつも含めてということですから、それも高校の責任はあるんですが、企業のほうでの指導を、企業内教育をやってもらうしかないということですが、即戦力ということではなくて、基本的な物作りの、さっきも話もあつたセンスとか志と言いましたけど、センスや志という気持ちだけでなく、大きなことを言えば、歴史的に工業というのは、どういうふうにして人間は物を作ってきたのか、その基本的なことは何かというふうな科目も含めた、検討していく必要があるのではないかと。

そういう基本的なところをきちっと学んだ子たちが、全部工業関係の自分の専門で学んだことの企業に全部行かなくてもいいんですが、そういう物作りの基本みたいなことを、きちんと学ぶような、そういう工業科にしていかなければいけないんじゃないかというふうに、素人なりに思うんです。

その地域の産業からいったら、それがこの広い北信で長野工業集中型でいいんですか、というふうに思うんですね。それはもちろん最終的には地域の皆さんがいらないといえればそれまでの話ですが、そこまで極端にやっちゃっていいのかなという思いがあつて、例えば私、ちょっと素人なりに見たいいろいろな指数を見たら、北信が一番今、産業が落ち込んでいますよね。四つの地域からいったらね。

そういうことも含めて、今の産業実態、何か企業の皆さんの前で素人が言うのは失礼ですけど、今の産業実態、例えば海外にシフトしているとか、そういうものを含めた産業実態を基本にして、高校の内容を変えていくということでもいいのかというのが、どうしても引っ掛かる。

総合学科では、それはできないんですよ。総合学科の中身は違いますよ。工業のことを特色付けて、例えば中野実業も候補に入れているんだから、中野実業の施設も使うんだから、そりゃ確かにあそこの総合学科をつくれれば、総合学科というのは工業の特徴がかなり強く出るでしょう。

でもそれは、やっぱり取り方。総合学科というのは、いっぱい科目は用意できるんですよ。いくらでも。さっきの環境だ、観光だ、そういうことも含めて、全部いろいろできるんです。だけどそれは、できるという夢物語であつて、現実にやるときは、教員定数もあつて、施設もあつて、生徒が来てどういうのを取るかということもあるわけですから、そうすると、ほんとに工業でやりたいという子が、総合学科には行かないんですよ。行けないんですよ。工業のことを少し学びながら、自分の将来を考えようという子は行くかもしれないけど。

そうすると飯山から、その北信地区の北のほうの生徒たちは、長野工業まで全部行かなければいけない。今も行っている子もいますよね、中実やめて長野工業に。だけど長野工業に全部行かなければいけないということになって、そういうことでもいいのかなというの

がひとつです。

それからもうひとつ言いますけど、これは工業科の問題じゃなくて、私は今、地域の動きとは、個人的にはちょっと違うんです。前から言っているように、私はこういうイメージなんです。総合学科を中野地区につくる。地理的にどうしてもつくるとしたら、地理的な面ではいいですね、確かに。離れていますから。これは飯山といたらちょっと遠すぎるとかありますから。

ただ、皐月がありますね。皐月との関係というのは、十分検討しなければいけないですね。競争してお互いにいい総合学科になるということも、それは可能性としてはあるでしょう。でも、皐月がどれだけお金をかけて、率直に言わせてもらえば長野市がどれだけお金をかけて、きちんとしたものをつくるかどうかということがありますが、例えば福祉は両方にあるという可能性があるわけですね。特色をどういうふうに付けるかというものもあるわけです。

そうすると両方きちんといい総合学科になっていくのか、我々が望むような総合学科になっていくのかということはどうなのかなと。つまり、私はこの地域では総合学科は1つあればいいんじゃないかと。じゃあ皐月をつくるんなら、皐月も公立だし、言い方は悪いですが、私学が勝手にやるのはしょうがないけれど、公立なんですから連携を取ってやるという、その皐月との関係がひとつある。

つまり心配しすぎだと言われればそれまでだけど、共倒れ、あるいは格差がついて上下、ということになるんじゃないか。総合学科にはない特徴を中野地区にはつくるべきじゃないのか、というのが1つですね。

それからもうひとつ、最後に言っておきます。もうひとつ心配なのは、中野地区、中野地区周辺、つまり中実や中野高校が担っている役割から見ると、率直に言って総合学科にどういう生徒が集まるかということはどう考えるかですよ。

総合学科というのは確かに見栄えがよくて、名前が売れていますから、2、3年はもつでしょう。生徒は集まるでしょう。でも基本的な考え方とすれば、その地域は目立つような特色のある、総合学科といえば、みんな「おお」と言いますよね。だから外から、どんどん生徒が集まってきてくださいという学校をつくるという考え方だとしたら、そこに地域の生徒が行けない子がいっぱい出ると思うんです。

入れない子は、どこかに行かなければいけない。だからそういう関係も考えなければいけない。中野地区を周辺とした子どもたちの中で、率直言いますといろいろな問題を抱えて学力が付かなかったり、そういう子たちが総合学科には入れないだろう。競争が激しくなります。外部から、どんどん来るわけですから、特色がありますから。

そうするとその子たちは、行き場を無くすんじゃないか。しかも長野地区が幾つかつぶれますね。飯山も1つか2つになりますね。そうすると飯山もいけない。須坂もなぜかと思ったら、長野南がつぶれたら、北部へ来て、それが玉突きで須坂へみんな行くわけですよ。

須坂も、競争率が激しくなる。そうすると中野地区のそういう子たちは行けなくなる。総合学科の新しい学校へ入れるよって、皆さん思っているかもしれないけど、現実はそのならないという心配がある。もう少し慎重に考えないといけない。

確かに総合学科はいい面がいっぱいありますよ。あるけれども、私が言っているデメリ

ットの部分については、いろいろフォローするでしょう。始まれば、当然フォローするでしょう。だから全国のいろいろな実践は、そういうのをフォローして何とかやっているという状況なんですよ。そういうのが問題として、いろいろ言いましたけど、最初に戻りますが、工業科の問題は、すごくそれは心配なんですよ。

それは総合学科では無理なんです。工業科をちゃんとやりたいなという子は、長野工業に行かざるを得ないということを感じます。

(中村委員長)

今のご意見に、何かご質問がございましたらお願いします。

(小山(壽)委員)

何か新しいことにチャレンジをしていくわけですから、当然課題やら不安やら心配やらは必ずあると思うんですよ。漠然たる不安というものを outsourced されても議論できない。根拠がないんですから。「なるんじゃないか」では、不安になる。

現在 12 通学区制から 4 通学区制に移行したんですよ。これはひとつの高校教育の流れとして、そういうふうな方向へ動いていく。その結果として、今、丸山委員さんがおっしゃったような地元の子が、地元の高校に必ずしも行かない。そういう現実の 4 通学区制の中で出ているのです。

逆に例えば飯山地区について言えば、飯山地区の子どもは飯山地区の高校が 4 つもあるんだから来てほしいということを、地域の中学校にお願いしているわけですが、しかし現実には 30 パーセント流出している。これは飯山からはじき出されているんじゃない。自分で選択して出ていっているんです。

その子どもたちに、選択してもらえるような学校づくりをしていかなければいけない。先ほど丸山委員さんが、例えば総合学科になったら、「こういう問題だとか、ああいう問題が出るだろう。出る可能性はあります」とするならば、そういうことを少しでも克服できるような教育課程をどういうふうにつくって、そういうものを提示していく。

そういうこれからの学校づくりの中における問題。そういう意味では、課題をたくさん出していくことはいいが、これは今後学校づくりをしていく上で、さまざまな配慮をしながら学校づくりをしていくというふうに考えていくべきだろうと思います。

だから「地元」ということで言うならば、4 通学区制に移行した時点で、そういう矛盾はもう既に出てきている。今後も加速するだろう。しかしでき得るならば、地域の子どもは地域で育てるべきだ。地域の高校へ、ぜひ入学してほしい。責任を持って、地域の高校は地域の子どもを育てるだけの、そういう役割を果たすんだということは、私はおっしゃるとおりだし、そういうふう to 努力をしていきたい。そのようには思っております。

だから、漠然たる不安で議論を進めるものはいかなるものかだと思います。

(丸山委員)

言っている意味はわかりますが、漠然たる不安ではなくて、今までのいろいろな資料、この前も工業科、職業科に代わり得ないという資料も出したし、全国のいろいろな状況からいって、そういうことが考えられるということで、私の個人的な漠然たる不安を言って

いるわけではないんです。

それから地元の子たちがという問題は確かにそうなんだけど、ほんとにいろいろ問題を抱えて、でも高校は高校進学が90何パーセントですから、いろいろ問題を抱えて大変で、不登校の問題も含めた、あるいは学力がついていなかったり、いろいろな問題行動があったりして、そういう問題も何とか入ってやっていこうという学校が、幾つかあるわけです。

そういう子たちが、行き場をなくすという、どこかへ行ければいいけど、行き場をなくすということです。今までそういう例があったわけで、単なる単純な漠然的な反対のために反対しているわけじゃなくて、漠然的な不安で言っているわけじゃないんです。

（塚田委員）

まずひとつ、先ほど丸山先生が、今の工業科の在り方うんぬんの中で、やっぱり工業の、物作りの歴史を通して、物作りの思想とか、ほんとの基礎をきちんと教えるべきだと言われたと思っているんですが、そういう意味では、まさにこの総合学科は、この4ページにイメージしている工業、商業、こういうところでしていると、一番教えやすい部分ではないかなと思います。

ですから基礎を教えるということでは、最もふさわしい高校なんじゃないかなと。もし統合して、総合学科にして、そこに工業もという選択肢があるとすれば、最もそういうことを教えやすい場所になるんじゃないかなと思います。

それからこの皐月との関係をおっしゃられたんですが、皐月を見てみますと、今言った工業、商業ということでは今のところ計画をされてないですよ。ですからそういう意味で、同じ高校がバッチングをするという心配は、今のところはないんじゃないか。これから出てくるかもしれません。「こういうところが、みんな勉強したがっているんで、じゃあ中野にもこういうものを、こういう学科を備えていこう」ということになれば、皐月とバッチングする場合もあるいは出てくるかもしれません。

逆に言うと、それだけそういうものを学びたいという生徒が多くなってくるということだと思います。いずれにしろ現時点では、そんなにバッチングということを心配する必要はないのではと私は思います。

（中村委員長）

皐月とは、コース、系列など分けていけばいいことですし、皐月のほうも工業がないといっても、すぐ隣の高専との連携とか、工学部にも協力を依頼しに長野市教育委員会さんから来たようです。

ですので工学関係のそういった科目も、ある程度設置しながら総合的ということとは考えられているというふうに感じます。もちろん同じ科目があっても、特色が違うという系列設定ができると思います。

（宮本委員）

11月の1日ですが、高校の募集定数の第一次が発表になるということで、中学校のほうでもそれに合わせた生徒達の意向調査を行っています。工業科だったら工業科、総合学科とかいろいろ出ていますけれども、子どもたちの意識とすれば、やはり学科というより

も、学科もひとつの魅力なんです、普通科でもどういう魅力があるかということについて、今、子どもたちと一緒に勉強する時間もありまして、やっぱり中身の問題だということで、ただ単に総合学科といっても、それはかえってひとつのイメージではなくて、今皆さんに論議していただいている中で、魅力づくりという中で、やはりどういう高校づくりができるのか。

ただメインに言っているのは、配置づくりみたいなもの。配置がなかなかすぐ言ってしまうんですけど、やはりその中身が大事なかなと思います。中学生の子どもたちも、その中身を見て将来どういうところに進学、どういう経験をするのか。例えば今出ている中では、地域の連携だとか、あるいは将来工業系の大学とか、専門学校だとか、県の施設だとか、そういうところと連携をするとか、いろいろな連携とか魅力づくりの中からやって、子どもたちは選んでいく。

ただ単に工業科だとかということで選んでいく子どもたちは、そんなに多くないと思います。子どもたちを見ていまして、やはり魅力づくりという中身の問題になってくるんじゃないかなと。あまり総合学科とか、いろいろな名前ですべてで勝負するのではなくて、やはり中身を検討して委員会でもできるだけ配置のことも含めて、魅力づくりではということで、提言が先ほどもありましたが、具体的な提言が、こういうことはどうかというようなことがあったら、やはり県の候補案に載っている以外でも幾つか提案していったら、いい高校づくりができればいいんじゃないかなと思いました。

(清水委員)

ただ今の意見と関連してくると思うのですが、やはり我々の議論を進める中で大事なひとつとして、やはり魅力ある高校づくりというものが大きなウエイトを占めていると思います。

この「魅力ある高校づくり」って何なんだろうと思ったときに、やはり地域の方が、親だとか企業だとか、そういった方々の願いとか思いみたいなものは当然あると思うんですが、はたして中学校から高校に進学するにあたって、また高校生、在校している高校生に、そういった子どもたちが、こういったところに魅力を感じているかということに視点を当てることは大事なことはないかなと思うわけです。

手前みそで恐縮なんです、須坂高校のPTAをやっている関係上、子どもたちの意識調査とかアンケートとかいったものに触れることがよくあるんです。その中にちょっと具体的な数字は忘れてしまって申し訳ないんですが、「この学校に来てよかったか」というアンケートに対して、8割規模の、私もちょっと驚くぐらいな割合で満足しているという答えが出ておりました。

それは何故かということやっぱり、これは私の主観も入りますが、進学に対する教職員の方々のケアといいますか、熱心さも含めていろいろなシステム上のこともありましようけれども、そういったものに満足しているというようなことではないかと思うのです。

須坂高校の場合、当然入学の時点では進学を前提にした進路決定をしているはずなんで、そういったところにおいて須坂高校の現状に非常に満足しているとういことにつながっているのだと思うんです。

またさらに言えば、来年度から単位を取得するにあたっての選択授業みたいなものも随

時採用していくと聞いておりますし、これは須坂高校に限らずどこの高校でもそうかと思うんですが、日々やっぱりどうしたら子どもたちのニーズに学校が合わせられるかということについては、ご努力していると思うんですが、やはり子どもは今の高校に何を求めるかということに、やはり着目すべきじゃないかなと思います。

ちょっと話は飛びますが、先ほど来お話があったように、企業側とすれば確かに採用するにあたって、高校生、実業高校を出た子どもたちだからといって、即戦力になるということはある得ないと。あり得ないという言い方は、ちょっと語弊がありますけれども、そこまで期待しないということはもう事実です。

やはり学校教育、また家庭教育も当然入ってくるかと思いますが、その子たちの資質というか、やる気だとか、責任感だとか、そういったもののほうが、より重要視されるんじゃないかと思うわけです。

やる気だとか、そういったものがあれば、飲み込みも早いですし、結局会社にすぐなじんで、自分の目標に向かってやっていくという形式が取れるんだと思うわけです。ですが、私も小さいながら製造業をやっていますが、やはり製図を見れるか見れないか。製図を読めるかどうかというのは、やはりちょっと気になるところです。しかし工業系を出たからといって、全員が見れるかということ、読めないのもいるわけなんですね。先ほどどなたかおっしゃっていましたように、基礎学力と人間としての資質が、やっぱり企業側とすれば重要視するところではないかなと思います。

実業高校と総合学科の関係ですが、私はちょっと前まで実業高校の要素を総合学科が全部カバーできるかということに非常に疑問を感じていまして、実業高校は実業高校で今後もあり続けるべきだし、形を変えろというか、内容を変えつつ充実させながら実業高校はあるべきだなと思っていたのですが、でもちょっと考えてみますと、総合学科というもののの中に、実業高校の良さというものを十分引き入れながら、実業高校の代わりができるんじゃないかなというような気がしてまいりました。

というのもやはり先ほどもお話ししましたように、実業高校を出たからといって、必ずしも即戦力だと、これはもう大学を出てもそういう話もありますし、ただ物作りというものに対する熱意だとか、自分の特性といったものに、物作り対工学系のものは、一番学びたいんだという意味が当然あるわけで、そういったことが実業高校でなくてはいけないということもないんじゃないかと思うわけです。

総合学科の中に、工業、工業と一口に言ってもいろいろありますけれども、さまざまな学科があってそこから選択するというのが、取りも直さず今の高校生なり、卒業する中学生のニーズに合えば、それはそれで魅力ある学校づくりになるんじゃないかなという気がしております。

(中村委員長)

ありがとうございました。

順調に議論が進んでいるのに申し訳ないのですが、休憩時間を。よろしいでしょうか。休憩時間を取りたいと思います。

【休憩後再開】

(中村委員長)

それでは委員さんがおそろいですので、再開したいと思います。坂口委員は学校と地域との仕事の関係で、急きょ欠席ということです。ご承知おきください。それでは再開します。

(小山(元)委員)

地域の方々のご意見を伺っていると、職業高校または実業高校については、やはり最先端の技術を学び、また教えながら育ったという感が非常に強いですね、必ずしもそうではないと思いますが。

牧委員さんと清水さん、塚田委員さん、それぞれのお話をお伺いしているところで、やはり高校を卒業してすぐには即戦力というわけにはいけない。その会社なら会社の教育を受ける必要があるという話でした。これはもう大学でも、委員長さんからのお話がありましたが、しかし少しでもそれに近づくような実業高校、特に工業関係、先ほどありましたけど、そういうことになっていくとやはり卒業した子どもたち、いわゆる学ぶ子どもたちには責任はないんですよ。だからそういう学校での学ぶ内容、教育課程ですね。これはずっと現在あっているもので来ていたのかどうかという。これはひとつ今問われているような内容だと思うんです。

だからこれを今度は大事に、やっぱり見直していく。県教委ではもちろん、高校教育課のほうではそれは十分おやりになっていると思うんですけどね。それがやっぱりもうひとつ現在のところで視点据えていくと。今度は入って学ぶ子どもたちにも、それぞれの心構えがあるかどうか。これは本来中学の、進路指導の問題でかかわると思うんですよ。

そういうものをこれから大事に見直していかないと、迎えるほう、送るほう、それはやっぱり以前から話になっておりますけど、これを地域間で考える方向で取り組んでいかないと、どういう高校にこれらの文句を入れようとも、やはり一番そこが問題じゃないかと思うんです。

ひとつはやはり高校へ送る中学の進路指導の中身といいますか、こんなことを言って失礼かもしれませんが、中学校での進路指導の体制というものを、もう一度見直したほうがいいんじゃないかと。こういう過渡期にきているんじゃないかと思います。

中学の先生方、ほんとに特に3年になるとご苦労されていらっしゃると思います。当然苦労されているのがわかるわけです。それぞれの地域、この機会に高校が、それから中学校が、そしてまたそれぞれ一番はやはり地域の親御さんだと思うんです。保護者の方が、やっぱり高校に対する考え方を、もう一度改革していく必要があるんじゃないかと、これを期に。

これは一番考えながら、再編といいますか、今の工業系等、商業科のことが出してきたわけでございますけれど、次世代育成というのはどういうものかということを、ほんとに全体で考えてみる、一番元じゃないかなと、お聞きしながら感じたわけです。

以上です。

(中村委員長)

最先端ということですが、特に基礎科目を教える中で、先生方ご苦労されて、基礎的事項に最先端の情報を入れながら科目を指導されているんだということです。大学の場合でいうと、学会活動や企業との共同研究の中から得られた最新の情報を、例えば私の分野ですと、材料力学という、非常に基礎的な科目の中で入れながら、講義をするというようなことは、毎年講義の内容を変えながらやっていって、努力していると思いますので、その辺は基礎といっても、最先端も含めて十分努力されていると思います。

宮本委員は、今の進路指導の過渡期の話はいかがでしょう。先ほど少しご指摘いただいたのですが。

(宮本委員)

今、小山先生が言われたとおりだと思います。今子どもたちは、悪い言い方をすると輪切りのような進学というか、そういうところに目が行きがちですので、ほんののことを言う先ほども話しましたが、自分をよく見詰めて、自分がわかって、少しでも自分の夢に向かえるような魅力ある学校を選択するような、中学校としても進路指導をやっていかなければいけないのかなと思います。

私のこの委員になりまして、論議の中で考えながら、やはり中学校のほうもこの機会に進路指導については変えていかなければならないところもあるし、検討しているところです。

(若麻績委員)

子を持つ親として、先ほども企業へ行っあいさつもできない子がいるというようなことを聞きますと、家庭のしつけが、家庭教育ですね。反省しなければいけないことになると思います。

私のうちは娘ですが、将来この方向性を見ていまして、誠にあやふやといいますが、今中3でこれから受験という段階においても、「夢を語る」要するに、学校の中でも、自分はどんな人になりたいかというようなものに対して、それなりの夢はあるんですが、はたしてそれが高校の次にどこへ行こうというような明確な目的意識になっているかといえ、なかなかそういうふうに至っていないのではないかなというような気がしております。

それは多くの生徒の中には、明確なものを持った人ももちろんいるわけで、地域として、特に長野、第1通学区は、信州大学工学部があり、それからまた高専もあり、そういった工業のとても高いレベルの教育環境といえますが、体験環境がそろっているという状況があると思います。それで工業高校が長野にある。

さっきもいろいろな議論の中で、子どもたちというのは、いきなり以前のようなすぐ職業意識を持って高校へ入っていく子から、ましてや中学からすぐに就職する子もいるわけですが、明確な目的というものがなかなか見えてこない。

そこでやはり「ホップ・ステップ・ジャンプ」といいます、中学でホップをしている、高校でステップを踏んでいる、その先ジャンプというようなイメージを持っているように感じております。

その中でもやはり、それぞれのレベルでステップを踏むときに、すぐに高専に行く、工

業に行くというレベルのモチベーションと、やはりどうしていいかわからないけれど、まだ工業を学んでいきたいというような、そういう子どもたち。その生徒たちは、やはりこの総合学科の中で、『産業社会と人間』というのを学ぶ中から自分の専門性は何なんだろうかということが見えてくるんじゃないかなと思います。

そして、今回つくろうとしている総合学科高校も、長野に皐月がありますが、そこには工業系はないわけですから、ある意味では多くの広い子どもたちをフォローアップできる、そういった工業のほうに例えば進みたいと、これは、長野からも、もっと南からも行かれるぐらいの魅力ある学校になっていく可能性を秘めていると思いますので、いろいろな意味で例えば、高専に行く、工業に行く、そうじゃないけど、もうひとつほしいというようなときには、大きな役割を果たしていける可能性を持っていると思います。

（中村委員長）

ありがとうございました。

（牧 委員）

ちょっと教えていただきたいのですが、清水委員からも出ましたが、総合学科高校の中身の問題なんです、カリキュラムを県内の総合学科を一律なのか。中身ですよ。教科の中身。

「いや、違うんだよ」と。それぞれの地域に合わせた中で、特色あるカリキュラムを組むんだというもののなか、それとも学校裁量によって、あるいは校長先生の裁量によって、カリキュラムを多くできるのか。いや違うよと。文科省の考えだよというのか、その辺がちょっとわからないので、教えていただきたいのですが、地域でそれぞれその特色を生かした学科だとか、あるいは実習だとか、そういうものもできるのであれば、ある程度その学校の魅力ある高校としての、ある面でのひとつの礎になるかなと感じはするんです。

その辺のところを、どうなのかちょっと中身の部分を。

（中村委員長）

以前、同じご質問が出て事務局に答えていただきましたが、もう一度お願いいたします。

（柳澤教育主幹）

今、カリキュラムのことについてのご質問がございましたが、基本的にはカリキュラム編成は学校長の権限でできるということであり、学習指導要領というのがございまして、それに基づいて全国一律にどこの高校を卒業するにも、この科目は勉強しておかなければいけないというものがございます。

いわゆる国語、数学、社会といった、普通教科の基礎的な部分の学習については、この科目を何単位以上とか、そういった決まりがございます。そういうこと以外は、基本的には学校の裁量権に任されておりますので、さまざまな科目設定ができるということです。

また今は、学校が学習指導要領に載っていない教科科目、そういうものもそれぞれの学校が決めて学習することができる。これはいわゆる「学校設定科目」と、こんなふうに言われておりますが、それぞれの地域や学校の特色を生かしながら、多くの学校がそういっ

た、その学校にしかない教科、そういうものも設定しているというのも現実にはあるわけでございます。

総合学科につきましては、塩尻志学館高校は前にも資料が出ておりますが、8つの系列でできております。これからそれぞれの地区に設置をしていく総合学科の中身につきましては、これはほんとにそれぞれの地域の特性を生かしながら、特徴を出していけるというふうに思います。

こういう系列でなければいけないとか、こういう科目の配列をしなければいけないとか、そういう決まりはございませんので、さっき青木市長さんからひとつのチャンスだということがございましたけれども、それぞれいろいろな学校、地域のニーズをくみ取りながら、子どもたちの期待に応えられるような系列をつくっていけると、こういうふうに思っております。

またもうひとつついでですが、専門高校との違いということで、この前資料を出したことがございますが、総合学科は普通教科と専門の職業科との中間的な統合した形ということになっておりますが、それぞれの系列ごとに25単位以上の職業教育にかかわるものを設けなければいけないことになっております。そういう意味では、1年生のときに基礎教科を勉強して、そしてその1年間かけて「産業社会と人間」という、必修修科目というお話が、前の資料に出ておりますけれども、そういう学習をとおして、将来自分はどのような在り方、生き方をしていくかというようなことを、1年間学習しながら2年3年の選択科目を決めていくと。

そういう意味では、志学館高校の報告を聞きましても、自分で選び取っていくということから、学習に対する意欲といいますか、モチベーションが高まるという点では非常に効果があったというような話も聞いておりますので、そういった形のものが総合学科と、こんなふうに考えております。

以上です。

(牧 委員)

すみません。今のお話の中で、中身の問題ですが必修科目という、必ず取らなければならない科目と、選択科目、生徒が自由に選べる教科ですね。その比率というのは、どのくらいなんですかね。1学年、2学年、3学年で違うのか、あるいはおしなべて3年までこのくらいの比率ですよ、というもののなか。

もしわかれれば教えていただきたいと思います。

(柳澤教育主幹)

恐らく、ちょっと今正確な数字がなくていけませんが、全体の3分の1ぐらいが必修科目。志学館の様子も聞いてみますと、2年生になっても自分の好きな科目とか、楽そうな科目とか、そういうものを選択していくということだけではなくて、例えば基礎教科である数学なら数学にしても、自分で二年目に、やっぱり基礎教科のさらに発展したこの科目を選びたいと、そういった形で、主体的に自分の将来を見据えながら、基礎教科もきちっと選んでいくというようなお話も聞いております。

3分の2ぐらいは、学校で自由に選べるような選択に設定できると思っております。

(清水委員)

ただ今、牧委員さんのほうから説明があったこと、まったく私も気になって以前質問させていただいて、言葉は悪かったんですが、金太郎あめみたいにとこの講座も同じような内容なんだろうなということで、質問させていただいたと思うんです。

確か塩尻志学館のほうでは、記憶がはっきりしないんですが、間違っていたらすみません。ワインとかそういった醸造関係も、地域に合わせて盛り込んでいるというお話を聞いて、なるほどなと思った思いがあります。

先ほど、ちょっと発言させていただいた中で、実業高校というか職業高校、それが総合学科に代わり得るのかどうかという話の中で、私はそんなような気になっていたんだと申しましたが、今日までこういった委員会の中で、総合学科についてのご説明は多々あったわけで、私なりに理解をしているつもりなんですが、やはり先ほどもちょっと雑談の中で休憩時間に話したんですが、やはり教育現場にいる者ではないものですから、イメージがわいてこないのが実際なんです。

そういったことからしても、あしたから初日ですが、あしたから何日かに分けて、研修視察がございましたね、それにはちょっと別に皮肉を言うわけではないんですが、大変忙しいんですけども、何とか時間を割いて総合学科を見ていきたいなというふうに思っています。

でもその中で1日だけですのでどこまで理解が深まるかということは、ちょっと行ってみないとわからないのですが、そこで子どもたちがどういう学習をしているかということ、を、やっぱり見てきて、理解が深まることを期待しているわけです。

実業高校が、先ほど小山委員さんがおっしゃったように、最先端というようなものについてやっていくべきだというお話は、とても大事だと思いますが、はたしてでも現実とすれば、かなり無理があるんじゃないかなという気がしないでもないんです。

学校の先生方が、最先端の技術だとか、そういったものを取り入れて授業を行うということについては、もちろんご努力はしていただいたほうが、それに越したことはありません。

やはり牧委員さんもお話しされているように、私もそう思いますけれど、個々の企業がかなり特化した技術を持っているんですね。また特化した技術でなければ、今、国内で製造業をやっていくというのは、かなり厳しいです。

特色あるといいますか、かなり差別化した技術を持っていないといけないもので、それが即戦力になるような企業の内容ということは、まず私はちょっと期待できないような気がしてなりません。

以上です。

(中村委員長)

金太郎あめのようなのではなくて、やはり地域の特性に合わせて、中身を充実していくことが可能であると。3分の2もほかの科目というか、独自の科目を設けていくことができるということです。この委員会でも先ほど来中身の充実ということていろいろな提案があります。そういうものも取り込んでいけるシステムになっていると思います。

最先端に関しては、やはり地域の企業さんに、工業の面ですが、ご協力いただければ、

ある特定の分野での情報あるいは機器を見せてもらったり、そういうインターシップ的なこと、郊外活動的なことで入れていけるんじゃないかなと思いますし、それは中野地区、それから飯山の地区、いわゆる北のほうには非常に高度な技術を持っていってる企業さんがたくさんあります。

特に飯山地区にもありますね。ディスプレイの大きな企業がありますし、中野地区も機械の分野などまだたくさんありますけど、そういった分野で優秀な企業がありますから、そういう力をお借りしていくということも、十分総合学科では可能ではないかなというふうに思います。

それからひとつ私が気になっているのは、コースは一度設定すると変えるのは大変なんでしょうか。例えば、大学でいいますと、学科というようなものを設けて、それを再編するのは最近は文科省の力が弱くなってきていまして、学校に任されるようになりましたが、その辺はコースを幾つか設定し、それを例えば何年か後には再編するということはやれるのでしょうか。

それができれば、実情に応じてさらに充実していけると思うのですが。

（柳澤教育主幹）

コースというか系列というような表現かと思いますが、その変更というのは当然その時々であり得るということになると思います。

基本的には教育課程を、普通科の場合もそうですが、「年度入学生」ということで、その年度に入学した生徒さんが、3年後に卒業するまでのものをまとめて提示をしますので、恐らく学校要覧を見ていただくとおわかりになるかと思いますが、普通科の学校でありましても、「16年度入学生用」とか、「15年度入学生用」とかありまして、その都度といいますか、実状に応じて変えていくということがございます。

普通科の中にあるコース制というのがございますけれど、そういうものも時代に応じて変えていくというようなこと。あるいは学科改編という問題につきましても、これも必要に応じてその時々で改編をしていくというようなことが可能になっております。

（中村委員長）

私は、教育はあまり改革というのはなじまないで、やはり改善を繰り返していくほうがいいんじゃないかなと思いましたので、ちょっと質問しました。

（丸山委員）

ちょっと総合学科の大前提というのを、やっぱりきちんと抑えておく必要があると思います。

総合学科というのは確かに、いろいろな系列を入れて、いろいろな地域の支援を受けながら、いろいろな特徴を入れていくことはできて、かなり融通が利くといいますが、それはできると思うんです。

だから確かに中野地区につくる場合に、工業科を基盤にしているので、施設もあるので工業科の特徴を付けるということとはできると思うんです。地域とのつながりもできると思うんです。

ただ本来総合学科というのはどういうものかということを、きちんと抑えておく必要があると思うんです。つまり系列であって、系列を選ぶんじゃないんですよ。コース制とは違うんです。コースだったらコース制を選べば、そのコースにかかわった科目を選んでいくと決まっていますけど、系列、工業系列を選ぶわけではないんです。

もちろん指導として、工業をやりたいんならおまえ工業系列をたくさん選べよという指導はできますけど、工業系列を選べば、全部これがつながってということじゃないんですよ。

だからもちろん『産業社会と人間』のところで、おまえはどういうふうな希望を持っているんだということや、職業観や将来の人生設計や、そういうことを勉強しながら、僕はどういうふうにしていったらいいかということをやって、ガイダンスをきちっとやって、選択を取れるように、系列の中から取れるようにということをやりますが、本来総合学科というのは、いろいろな科目、いろいろな系列を経験して、それでその中で自分が向いているのは何かということ、やっていくことじゃないですか。

1年のときから共通で何かやって、2年のときから選ぶからとした場合に、産業社会と人間で、ちゃんとその指導して、どういう方向を決めて選ぶという、そういうこともありますが、けれども、実際総合学科の良さというのは、いろいろな系列から選んでみて、それで自分が将来どれが向いているか、どれに興味がわくかということをやってみるという良さがあるわけですよ。

そうじゃなかったらコース制と一緒になんです。普通科のコース制とガッチリやればいい。あるいは職業科へ行けばいい。ただいろいろな系列を選べるよ、自由に選べるよということがメリットなんですよね。

そうすると極端にいうとこういうことになりませんか。いろいろな系列、科目、いろいろな系列を経験した結果、結局その結果就職というよりもむしろ、私、僕は、こういう方向がいいと。福祉がいいとか、あるいは技術系がいいとか、体育、スポーツ系がいいとか、あるいは工業系がいいとかとって、その上の学校、専門学校や短大、大学に行って専門的なことをやるというための学校なんですよ。

そういう位置付けなんです。だから工業科にシフトして強くはできますが、工業高校には代わらない。そういうことなんです。だから工業のことをしっかりやりたい子は、そこには行かない。基本的に。だから長野工業に行くということになるわけです。

だから工業の勉強をきちんとやりたいという子は、もし総合学科に入ったらそれはやっていく中で工業科をやりながら、工業系の専門学校や上の学校に行くということを選ぶわけです。

というふうに、私のイメージはそう。そういうことをきちんとね。だから議論をしていると、コース制の、こういうコースへ入れればいいのか、こういうコースへ入れればいいのか言うけど、コースではない。コースはまったく違うことなんです。本来のものは系列として科目の同じ種類の科目の系列をつくるだけであって、系列を超えて選べるのが総合学科の良さなんです。

だから福祉中心にやりたいとか、工業中心にやりたいとか、商業中心にやりたいという子は、もともとそこまでの意識を持っている子は、総合学科に入る必要はないんですよ。もっとそういうことがきちんとできているコース制や専門学校に入ることになるんですよ。

う。

だからこの議論の中で、最初の議論のときに、中学の生徒の中で職業科へ行こうか、普通科へ行こうか迷うと。職業科といっても選べないと。そういう子はいいかもしれないという意見がありましたがそりゃそうですよね。でもその中でやっていって、そこで終わりというよりもむしろ上に行くためということになるんじゃないですか。

そういう点でいけば、その地域で工業高校をつぶして総合学科にするということは、工業のことはあきらめると。多少工業の基礎的なことはできますけれども。

それからもうひとつ言いたいのは、これはさっきのアンケートですよ。工業教育研究会のアンケートで、165社の企業の意見の中で、工業高校でどういうことをやってほしいか、専門教育の中でどういうことをやってほしいかというトップ、50パーセントは実験、実習なんですよ。基礎的な理論というのが30パーセントなんですよ。そういうことを職業科でやってほしいと。

実験実習というのは、できるように思いますけど、総合学科ではかなり難しいものですよ。確かに工業だけを選んで、その科目だけを選んでということ是可以できるかもしれませんが、どれだけ工業の先生を用意できますか。ほかのことがあるんですよ。工業だけをうんと特徴付けちゃったら、総合学科でなくなっちゃうんでね。いろいろのをやらなければいけないから。

だから総合学科というのは、職員の側から言わせると、職員のほうが大変なんですよ。なぜかと言ったら専門外の科目をいっぱいやらなければならない。7科目、8科目やるんですよ。まったく関係ない専門科目をやるわけですよ。そういう先生も含めて、いっぱい先生も付けばいいけど、一定程度しか付かないから、そうすると工業科だけの先生をいっぱいいつくって「工業を集中して勉強できる」とはできないということなんです。

そこまでどんと付けてくれればいいけど、お金と人間をね。そういう点でいくと、やっぱり工業は一定程度の知識や技術はできるけど、それでおれは工業向いているなということを、確信を持てるような学びをやって、それで上に行く。じゃあ工業系の上に行こうということになるんじゃないかなと思うんです。

（中村委員長）

工業のほうに力を入れる、特色をつくっていくということも可能だと思うんですね。それは地域が望めば、あるいは推進委員会の要望が強ければ、ということだと思いますが。

（青木委員）

一般論的に、私は総合学科高校というのは、今、丸山委員がおっしゃったというふうに、もうがんじがらめにその性格といいますか、総合学科高校の使命が決まってしまったものと私は思っておりますので、もうちょっと柔軟性を持った専門的なことを。

それは工業、専門高校と比べると多少なりともレベルの違いがあるということは、客観的に見てあるとしても、少なくとも子どもたちが、求めるものに対しては対応できる。しかもひとつの方向に定まらない子どもたちにとっても、もうちょっと選択肢を広げる意味で、入り口の部分を勉強もできるという、非常に多目的なものに対応できる高校になり得るんじゃないかという期待感を持っている1人ではあります。

ちなみに中野の報告を申し上げましたけれど、総合学科の中で委員さんたちがいろいろなことを議論していますが、1つ、2つ、ちょっとエピソードをお話しさせていただきたいと思います。

先ほど牧委員さん、清水委員さんからもありましたけれども、塩尻志学館高校のワイン醸造の話をされましたよね。ああいった資料を見た委員さんたちが、じゃあ中野の地はなんだろうと。中野の地はどう考えても、それは工業という、歴史的に工業科の歴史はあるわけですけども、やはり農業も相当重い歴史を置いているわけであります。

中野の農業はなんだろう。今はきのこだね。果樹だねという話になるわけですね。そうするときのこ、果樹、いったいその系列の中に、どう位置付けていったらいいんだろう。塩尻志学館高校にワインがあるように、何か地域の総合学科高校としての主張は何だろうとなると、じゃあ地域特産コースなんていう名前でもいいのだろうか。それじゃちょっと意思表示が弱いな。これはやはりワインと同じように、菌竹コースだとか、果樹コースだとか何というようなことが出るぐらいの議論が深まっていることは事実であります。

それから併せて先ほど、これも清水委員さんがおっしゃったかな、地域の責任の話があったかと思います。その話の中には新しい高校ができるならば、地域を挙げて、地域が連帯責任を負うぐらいに、この学校の今後をしっかりとスタート時点から見ていく必要があるよねという声も、会の中では参加者のほうから出ていると、そんなことを報告させていただきます。

（中村委員長）

ほぼいろいろな議論が出尽くしたかなと思うんですが、丸山委員からは、まだ不安の面。それから皆さんのイメージと違うというご指摘等いただいていますけれど、ほとんどのご意見が総合学科を設置して、今の候補案では中野地区が出ていまして、その配置もほぼ適切ではないかというご意見。

それから中身を充実ということで、地域の特色を生かしたものをつくり上げていこうという方向だと思いますが、いかがでしょうか。中身の充実の面に関しては、この推進委員会としては、今までいただいたご提案のようなものを、実施計画の中に生かしていってほしいという言い方になると思うんですが。

（塚田委員）

地域の特色ということで、それもととても大切なことだと思いますので、そういう声を吸い上げるシステム等、地域と総合学科の中にできるものになればいいのではと思います。例えば小山先生にお聞きしたいんですが、学校評議員制度というようなものがある。

あれは例えば市民の方の議論を吸い上げるということでは機能しておりますか。

（小山（壽）委員）

今まで学校が直接外部の方の意見をお聞きするというのが、あまりなかったものですから、学校評議員制度も今始まったばかりで十全に機能しているとは言い難いですが、やはりひとつの窓口として出てきているのではないかなと思っています。

今、中野について言えば、市民会議が立ち上がっておりますので、恐らくその市民会議

を何と言いますか、案が決まってしまったところで解散するのではなくて、むしろ案が決まったところから、どういう学校づくりをしていくのかという意味で、むしろスタートだということで、そのまんま継続されていけば、市長さんもおられますので、十分地域の声を学校に反映していくことができるのではないかと思います。

ぜひそうでなければ、いい学校をつくることができないんじゃないかと、そんなふうに思います。

（丸山委員）

委員長さんがおっしゃった方向は、何か私だけみたいですので、大方の方向はそれでしようがないと思います。それを蒸し返すつもりはありませんので、そのまとめでいいんですけど、最終的にはこれは地域の意見を聞くわけですし、ちょっと個人的なことを言えば、個人的といいますが、中野高校の同窓会の独自の意見を、独自といいますが、意見を出すというふうに聞いていますし、それから中野市民会議も、そういう方向になっていますので、例えばその中に時期の問題なんかも含めてあるわけですね。

そういう点では、そういう意見も聞きながら、あるいは視察もこれからあるわけで、そういうことをやった上で、それからほかの関係ね。これはさっき私も申し上げましたが、長野南とかの関係も含めた関係はどうなるかということも、大きく関係するんですよ。そういう点では、方向として私も全部ひっくり返すという気持ちはありませんので、全体として大方ね、総合学科についてその方向でいいんじゃないかという意見が多いということについては、ここにまとめてもらって結構ですが、最終的な決定というか、そういうのはほかのことも調整を含めてやっていただきたい。それから地域の意見を聞いた上でやっていただきたいというふうに思います。

（中村委員長）

ありがとうございました。今後地域の意見等、各種団体からこの場でご発言いただくという予定ですので、そのときにもうこちらからの質問もよろしいわけですから、そこでお聞きしたりして、地域の意見を十分反映するようにしていきたいと思います。

それで今日の計画は1区、2区ということでやっていこうということですので、まだ時間がありますから1区のほうへ進めていこうと思うんですが、先ほど小山（壽）委員から資料をいただいています。

これを見ながら、それから候補案の説明のほう、特に再編後のイメージのあたり、何か課題があるのか、その点お聞きしていこうと思います。それでよろしいでしょうか。

それで、中高一貫というのが、以前も議論していただいたのですが、小山（壽）委員から提案していただいた、これはある一部の団体ということですよ。飯山地区全体のというわけではございませんけど、中高一貫教育の内容が含まれている。これは今までも、魅力づくりということで提案されてきています。

この辺が候補案のほうとはちょっと違うところかなという気もしますし、それからグリーンツーリズムですか、下高井農林高校に関しても、多少触れられている点というところがあります。そんな点を踏まえながら、少し配置を主に。それから3校を統合という、非常に難しいステップではないかと思うんですが、その辺の手順等も考えながら議論をして

いきたいと思います。

何か、ご発言はございますでしょうか。

(宮本委員)

中間報告の内容について、小山(壽)委員のほうから冒頭に説明があったのですが、一部の団体ということですが、かなり踏み込んだ内容になっているんですが、飯山全体の動きとしては、どんな感じになっているか小山(壽)委員のほうでわかっているところで説明いただきたいと思いますのですがどうですか。

(小山(壽)委員)

そちらにも、同じ小山(元)委員がいますが、飯山市の教育委員長さんでありますので、また補足する部分については小山(元)委員さんのほうで補足をしていただきたいと思います。

本校の特別委員会は、先ほど申し上げましたように、6月の初旬に同窓会で設置要綱を決めまして、6月の22日に第1回目の会合を持っております。実は4つの高校がありますが、4つの高校の校長、PTA会長、副会長、それから同窓会の会長さんたちと昨年来、どういうふうにしていったらいいかなという協議を何回も重ねてきています。

本年度に入ってから、ちょっと今回数を申し上げられないくらい多くの会合を、PTAの役員と学校長の間ではしてきている。当然そういう中で交わされた意見も、同窓会のほうにはお伝えをして、同窓会のほうとも今まで7回審議をしてきて、こういう中間報告をしたわけであります。

実は今日も第8回目の特別委員会が、今日の夜行われることになっております。これとは別に、飯山市、野沢温泉村、木島平村、栄村、4市村が集まりまして、我々も一部そこに加盟をしているわけですが、飯水岳北の高校の将来を考える会というのがあります。

これは規模でいうと60人規模で、高校の関係者、中学校関係者だけではなくて、地域の産業の関係者、行政の方々、そういうような方々も入っている。あるいは小中のPTAの代表の方も入っている、そういう会がありまして、そこでは飯山市内の高校を2校存続してほしい。普通高校2校を存続してほしいという案を出しております。

当然それは、桂蔭会特別委員会の考え方、あるいは4校の校長、PTAの役員の話をしてきた考え方とは違いますので、その部分についてどういうふうに擦り合わせをするのかということで、協議を重ねてきているという、そういう状況であります。

今の段階では、4市村の首長さんたちに一応最後の取りまとめはお任せしようと。しかし桂蔭会としては、飯水岳北の高校の将来を考える会が発足する前から活動をしている。従いまして飯水岳北の高校の将来を考える会のスタートのときに、本校の同窓会長がこれとは別に我々としては審議をしていきますので、別の結論を我々としては持って、それを発表するということはある得ますよというお答えをスタートのところでしてあります。

そんなことから今日まとめましたので、中間報告という形ですが、しかもこれは推進委員会あるいは高校教育課へお出するというものではなくて、特別委員会が同窓会長に答申するという形の中間報告ですが、ご覧をいただいたということでありまして、飯山地区、まだこれ一本で固まっているというような状況はまったくございません。

(小山(元)委員)

今、飯山岳北地区の小山校長さんのほうから説明していただいたとおりでございます。ただ誤解していただきたくないのは、決して桂蔭会と岳北地区高校の将来を考える会が分裂しているわけではございませんので、これはあくまでも一緒になって考えているという立場でありますので、それぞれの立場の良さを生かしながら、やはり大事に将来を考えていきたい。

あとまだ違うふうにいるいろいろ考えて、検討しておられる会もございます。そういうのがありますので、あくまでも一緒になって考えていくと、そういう立場でありますから、その点ご理解いただければと思います。

以上です。

(中村委員長)

かなりまとまったご提案をいただける予定だということですので、その前に我々も少しまとまっておかないといけないというふうに思いますので、ぜひ候補案の説明のところをベースにして議論をしておきたいと思います。

何か、意見はございますでしょうか。私がどんどん言ってしまうといけないかと思いますが。

例えば3校を統合するという作業ということについてはいかがでしょうか。

(丸山委員)

再編後のイメージのところ、同時に飯山南高の校舎、校地も利用していくというふうにあるんですね。これは統合した上でというのは、私は難しいと思っています。

双方の校舎が相当離れていますよね。ひとつの学校なんだけど、別の校舎という形になるんだろうと思うけど、だけどそれはなかなか一緒に行動はできないですよね。何か別の学校みたいになってしまうわけですよ。

そういう点では、状況からいったら、やっぱり2校維持しながら南高、北高維持しながら、状況を見ながらというふうに、年次的といいますか、別の学校として維持しながら、いずれはそういう状況の中で、そういう統合という方法もあるだろうけど、そういうことのほうがいいと思います。

というのは、例えば統合したあと、南の校舎、北の校舎を使うという場合に例えばクラブですね。これも同じにはできないですね。生徒会だって、同じにはできないじゃないですか。行事その他はどうなのか。ちょっと離れすぎている。そういうこともあるので、まったく別の校舎で別の学校みたいになってしまう、そういう点では少し、バツサリ始めから名前だけまとめてしてしまうのではなくて、両方使いながら徐々にその状況を見てということはある得ると思うんですが。

(中村委員長)

事務局に、「当面は」という意味合いを、ご説明いただきたいのですが、例えば使わなくなった校地を売却して、その費用を新しい高校の用地に当てていくとか、そういうような、どうでしょうか。

(三澤教育支援主事)

「当面は」のところですが、中学校卒業生数との推移と、あと入学してくる生徒さんの状況を見ながら、今の飯山市内にございます高校については、4学級、5学級規模の施設でございますので、それに合わせながら統合を考えていかなければいけないということでございます。

生徒数が減少してまいりますので、その様子を見ながら校舎を1つにしていくというスケジュールで考えているところであります。

(中村委員長)

そうするとある程度時間が必要ということですよ。減少の幅を見ながら。

(三澤教育支援主事)

それと飯山南高校につきましては、体育科がございまして、体育科の利用している体育館等の施設設備、これも有効に生かしていかなければいけないだろうという手もあります。いずれにしても、多少の時間はひとつの校舎を使っていくには、生徒数の推移を見えないといけないということもございます。

(中村委員長)

そうすると丸山委員がご指摘いただいていることは、かなり長い期間で、体育館の設備といいますと、それは結構充実しているでしょうから、すぐ使わなくなるということではないでしょうし、かなりの距離を移動するということを考えていかなければいけないということでしょうか。

(小山(元)委員)

岳北考える会の立場ではなく、私の立場で考えさせてもらいますけれども、やはり生徒数が減って、少子化になっていくことは、これは当然でございます。将来的には、当然もう1校にならざるを得ないということは、これは大前提にして考えているわけですが、これは小山(壽)委員さんのほうから出された、これも大事なひとつの方向かと思います。

やはり地域住民の声を総合しますと、3校が1つに統合されるというのは、これは地域とすれば非常に大きい問題なんです。ですから6月24日ですか、再編案が出されたというのは、これはだいぶそれぞれの地域のほうで、やりとりをしながら小山校長さんと一緒に歩いているわけです。

やはり高校が1つ減る、2つ減る。実際に配置は減っちゃうわけです。これはやっぱり地域文化的拠点がなくなるわけです。やはり1つ高校が無いといことで、地域の産業からはじまって、すべての経済関係にまで大きい影響を与えるのが地域なんです。

だから地域とともに立つ高校というので、今まで支援されながら、また支援してお互い連携、提携しながらやってきたわけですが、ここで一挙に3つが1つになっていくとなると、やはり地域住民の気持ちからいいますと、我々の高校がなくなるんだという、そういう強い思いというのは、非常に大きいわけですね。

それでやはり皆さんがご存じのように、飯山地区はスキーで高校は頑張ってきているん

です。統合されるという、それぞれの立場の高校も、全国インターハイで、高校総体では優勝していることが何回もある、それぞれの高校であります。またそれぞれの特色を持って今まで経営、運営していらっしゃる校長先生をはじめ、先生方がほんとに熱心に地域に溶け込んでやっていらっしゃるわけです。

そういうことを考えていきますと、やはり3つがすぐ1つになるといことは、やっぱり抵抗がございます。それは気持ちの上でこういう話をする、やはり議論に対象にならないと一蹴（いっしゅう）されるかもしれませんが、地域的考えも住民の方々の支えてきたものというのは、大きな歴史があると思うんです。

ですから高校設立するときまで、かえってやはり考えていき、今後のどうあるべきかということをしかりと地域として考えている状況だということで、先ほど言っていますように、やはり地域とすれば特に直1つになるのではなくて、あるいは2つに統合し、そして最終的には1つになるというような、可能な限りの企画ということを考えていくのも、ひとつのところでございます。

それらのようなことを、また皆さんの、いろいろ検討してもらえればと思います。

以上です。

（小山（壽）委員）

おっしゃるとおり、3つを1つにするというのは、大変な作業になっていくと思っております。しかしそういう意味で、克服しなければいけない課題はたくさんあるだろうと、こういうふうに思っております。

今、4つの高校といえますのは、3つを一緒にするということではあるわけですが、下高井農林も含めて、今先生たちに集まっていたいて、どんな課題があり、その課題をどういうふうにしたらクリアしていくのか。そういう会議を3回ほど、既に持っております。

さらに今後、さまざまな課題を出して、明らかにして、地域の方にもお話を申し上げなければいけないなど、そんなふうには思っております。

恐らく全国的に1つの高校が2つの校地、校舎を持つという例は、1年のときから、2年のときから、3年のときから、そういう年限でいえばあるとは思いますが、相当多少長期にわたって（長期と言っても10年先ということではないと思いますが）2つの校地、校舎を活用していくという例は、恐らく全国的にいても少ないのではないかと思います。

そういう意味で、多くの課題が予測される。しかしこういう時代でありますので、先ほど高校のイメージのところで、県の支援が得られるというお話もありましたので、できるだけ支援を得ながら、そういう課題も解決していきたいと思っております。これは地域の方々にもご理解いただかないと、さらに流出が増えるという可能性がありますので、そうならないように、お話をしていきたいと思っております。

（中村委員長）

順調に進み始めたところなのですが、時間ですのでそろそろ次回へのまとめとしておきたいのですが、きょうは1区、2区について、特に2区についてかなり踏み込んで意見をいただきまして、具体的な所をご議論いただいたところです。

もちろん2区の中でも須坂地区の話とか、以前にはちょっと出ていましたが、きょうは

ありませんでしたが、残っているところもあるかと思うんですが、次回はきょうの続きということで、飯山地区の今の3校の統合の手順と、具体的な再編のイメージですが、その課題と今小山（壽）委員から指摘をいただいた、どのような支援をしなければいけないのか。そのところを出していただくというふうに思います。

これは当然、その地域からのご意見も踏まえながら、進めていきたいと思いますが、次回はきょうのような形で、具体的なところを3区、4区というふうにやっていきたいというふうに考えています。もちろん丸山委員から指摘されているとおり、全体にかかわることが非常に多いことでもありますので、それもまた生かしながら、少し具体的なものを持って範囲を絞りながら、見渡していくという、難しいとは思いますがやっていきたいと思っています。

それでよろしいでしょうか。何か特に、まだこの議論が不足しているとか、あるいはこういった資料がほしいというようなご提案がありましたら、お願いしたいと思います。

（青木委員）

意見を聞くというものは、どんなことでもいいんですか。

（中村委員長）

後ほど事務局から説明をいただきますが、後の次回あたりに幾つか提案いただけるかと思いますが、それでもし時間を相当取るようであれば、2回にわたることも考えてもよろしいかと思うんですが、その辺は委員さんのご意見で、1回で絞って聞くべきだとか、少しずつ地域の議論の速度もありますので、その辺はいかがでしょうか。

（丸山委員）

募集出したように、あまり15分という時間で出したとか、数多く提案があったから5分だとかというふうに切らないでほしいと思います。そのつもりで来るということもあるので、それで15分でうかがう、足りないところがあったら2回というようなことをやるべきで、あまりそのきちんと時間を区切るのではなくこちらからも質問したいこともあるので。

（中村委員長）

今の様子を見ていますと、問い合わせの関係からいうと、それほど多くはならないだろうということで、1回1時間ぐらいずつ取っていけば、2~3回時間をとればよろしいかと思っています。

それでは、十分意見を聞く、それから議論をしたいと思います。我々から提案者のほうに質問するなり、確認をするなりする時間も取りたいと思いますので、それほど時間を絞らずに十分に一団体、一グループに時間を取っていただくという方向で、その辺の状況を見ながらやっていきたいということです。

そうしないと地域のほうの議論と、スピードがちょっと合わないので、そうしたいと思っています。

それでよろしいでしょうか。では、次回飯山地区、それから3区、4区といきますので、

今までご提案いただいているような資料等十分ご確認いただいて、またご発言をお願いしたいと思います。

できるだけ具体性を持って、臨みたいと思います。次回の予定について、事務局から視察の件も含めて、説明をしてください。

（三澤教育支援主事）

最初に視察の件でございますが、お手元に封筒を、小さいほうの封筒ですが、ご用意させていただきました。そちらのほうにも個々の日程の行程等掲載させていただいておりますので、ご覧いただければと思います。

それと次回の日程についてですが、地域等からも提案というような時間も必要だと思います。一応今のところは、11月12日を予定させていただければと思っております。

またいろいろご都合等あれば、また委員長さんと相談させていただきまして、調整させていただきたいと思います。

（中村委員長）

12日は、午前でしょうか、午後でしょうか。

（三澤教育支援主事）

一応午後の予定で考えておりますので、ご予約をできたら考えておいていただければと思います。

（小山（壽）委員）

午後が1時からですか。

（三澤教育支援主事）

はい。

（小山（壽）委員）

土曜日でいいですね。

（三澤教育支援主事）

はい。土曜日の1時からです。

（中村委員長）

そのような予定で、よろしくお願ひしたいと思います。特に何かございますか。よろしいでしょうか。

では、第10回高等学校改革プラン推進委員会を閉じさせていただきます。どうもありがとうございました。